

はじめに…

当園では0歳から6歳まで一貫した保育の基軸として、モンテッソーリ教育を行っております。開園以来4年を経た昨年度の利用者調査では、保護者の皆様のモンテッソーリ教育に対する評価と期待が非常に高いことがわかりました。そこで今年から、教具だけではなくさらに奥深いモンテッソーリの世界をご紹介します、子育ての一助となることを願ってこの講座を開きます。

今回はマリア・モンテッソーリのご紹介をし、次回からは「創造する子ども」(マリア・モンテッソーリ著、エンデルレ書店)を共に読み解く形で進めようと思います。(園長 正岡里鶴子)

第1回 マリア・モンテッソーリ小伝

(1) 生い立ちから

マリア・モンテッソーリ(1870-1952)は、イタリアのキアラヴァレで生まれました。謹厳な父と信仰深い母を持ち、ずば抜けて勉強ができたわけでもないけれど、幼い時から上品で自尊心を持ち、品位を重んずるよう躾けられ、恵まれない人々のために労することや、友達に対して優しく思いやりが厚かったといえます。14歳頃から数学や生物学に興味を示し、やがてローマ大学医学部に合格しますが、当時は女性が医学を志すことは社会の慣習に反し、父の大反対で経済的援助を絶たれてしまいます。しかし信念を貫き様々な困難を乗り越え、イタリアで初めての女性の医学博士となりました。

(2) 知的障害児教育から、健常児教育へ

卒業後ローマ大学付属精神病院の助手となり、たくさんの知的障害児と関わる中「医学的な問題というよりは教育的な問題にある」ことに気付きました。そのための教育施設を設置することを訴え、実現した施設で2年間の実践を行い多くの成果をあげ、ここで得た理論と方法は健常児にも適応できるという確信を得ました。その後ローマ大学や女子師範などで教鞭を取る一方で臨床に携わり、研究と実践経験の両面を積み重ねました。

(3) モンテッソーリ教育のはじまり

1907年、ローマのサン・ロレンツォに初めての「子どもの家」を開きました。貧しい人たちの住むスラム街で、おおよそ3歳から6歳までの子どもが60名ほどでした。野放し状態で荒

れていた子どもたちの「手」に「教材」を与えることによって、子どもたちは大きく心の成長を遂げていきました。「お仕事」の始まりですが、何よりも大きなことはそのことによる「子どもの心の内面でおこる変化」への気付きでした。モンテッソーリは医者の観察眼をもって子どもの行動から学び、これを発見したのです。そこでの成功は、その後モンテッソーリ・メソッドとして世界中で受け入れられていきました。

(4) 遠大なモンテッソーリの哲学へ

モンテッソーリの生きた時代は日本では明治から大正・昭和にかけてであり、世界は二度の大戦を経験した正に激動の時代でした。自由を謳歌すると同時にファシズムの台頭を目の当たりにし、インドに亡命しました。そこでの東洋哲学との出会いによって思想的に大きな影響を受けたようです。こうした背景の中、モンテッソーリは平和を希求し、宇宙的な規模の中で人間生命をとらえ、その存在意味を問うていきます。これは「コスミック教育」と言われ、遠大な教育プログラムです。

モンテッソーリが投げかけた課題は実に今日的で、没後半世紀以上経った今尚、我々の考えている教育は未だモンテッソーリに追いついていないと言わざるを得ないのではないのでしょうか？その教育はまさに、私たちの目の前にいる赤ちゃんから始まるのです。

＜参考文献＞マリア・モンテッソーリ/リタ・クレマー/新曜社、モンテッソーリ教育学入門/市丸成人/学研、人間らしき進化のための教育/マリオ・M・モンテッソーリ/ナツメ社、なぜいまモンテッソーリ教育なのか/ポーラ・ボルク・リラード/エンデルレ書店、モンテッソーリの教育・6歳から12歳/マリア・モンテッソーリ/あすなろ書房、モンテッソーリ子どもと学校の危機/G・シュルツ=ベネッシュ編/エンデルレ書店他

本講座はモンテッソーリ教育を理解するためにマリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」(エンデルレ書店/原著 1949 年)を、読み進めていく形で行います。60 年余の歳月の間に科学的には古くなっている部分もあるかと思いますが、変わらぬモンテッソーリの子どもと人間への愛の精神を、一緒に学んでまいりましょう。それらは今日なお深く、私たちに多くのことを示唆してくれています。

第 1 章 世界再建に果たす子どもの役割

60 年も前にモンテッソーリはこんなふうに言っています。「世界は分裂状態にあるが、人間は平和で調和のとれた社会を築き戦争を無くしたいと願っている。しかし、日常事象を支配し統制するに至らず、むしろその犠牲になっている。教育は人間のレベルを高める一法であるが、子どもの改革的建設的力を引き出そうとせず、ただ頭の教育となっている。人間の全体的形成がなおざりにされて一体知識の伝達にどんな意味があるのだろうか？ 精神の本質、社会的人間性、個人そのもののものにひそむ計り知れない世界の潜在能力—これらこそが大切で、それは子どもの中にある。子どもは人間の建設者である。人間の可能性を発展させることが、教育の目的であるべきである。」

「子どもは特有の心的天性を持って生まれてくる。よって人間性そのものに目を向けた教育は、誕生と同時に始められなければならない。人間は生まれてから最初の 2 年間で最も重要である。子どもは大人とはまるで違った心理形態を持つ。子どもには知識を吸収する能力が備わっており、自分自身を教育する能力がある。」

「子どもは 2 年間の中で、総ての身边にある物を認識し理解し環境に順応する。言語もしかり。将来の大づかみな知性や宗教観や特定の国民意識や社会意識に育っていくものの複合体を形成する。3 歳で人格の基礎が出来上がっている。どうしてこんな事が可能なのか？ 観察と何度もの実験の結果、『子どもは文化を〈吸収する能力〉

を持つ』と確信した。このことから私たちは、子どもの為に特別に準備した文化的要素がいたるところにちらばっている環境を用意した。教育とは先生が与えるものではなく、環境の中でのあらゆる体験により体得されるものである。先生の大きな仕事は、適切に準備された環境の中で、子どもが文化的活動を行えるように一連の動機を用意し整えることである。」

「自由な発達の中に本来の性格を現した『人間』の姿が現れる。いかなる教育上の改革も人間の人格の発達に基づくものであるべきである。生まれた時から精神的発達を開始し、特に初めの 3 年間で最も集中的に発達するということを覚えておく必要がある。子どもは自分自身の内面に既に生まれながらにして持っている綿密な発達の計画に従い、『人間』を築くために疲れも知らずに励んでいる。子どもを私たちの知性の建設者とみなせば、子どもの気高さが見えてくる。私たちは、その手助けができるに過ぎない。こうして『新しい人間』が生まれれば、人間社会の将来を定め、形成し得るようになっていくだろう。」

この第 1 章には、モンテッソーリ教育の根本が述べられています。子どもは生まれた時から、まだ外には現れていませんが、「人間の尊厳」の全てを備えています。私たちはその見えざるものに最大の敬意を払います。子どもは未来の世界への希望であり、宝物です。

子どもは単に大人を小さくしたものではなく、全く違った心的形態を持つものです。子どもの特性を知ることにより、どうしなければならないかがわかります。私たちは、子どもについて真摯に学んでいかなければならないと思います。

(園長 正岡里鶴子)



先月号は、「できるだけ私見を入れず、モンテッソーリの考えを伝えよう」という思いで書いたところ、要約そのものになってしまい「難しい。さらに解説が欲しい」というご意見をいただきました。今月号は、少し自分の言葉を足して書いてみようと思います。試行錯誤です。形が定まるまでもう少々時間がかかりそうですがよろしくお願いします。

マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第2章 生涯にわたる教育

モンテッソーリは「生まれた時点に始まり、生涯にわたる教育」ということを主張していました。「教育」を大切にしていますが、モンテッソーリのいう「教育」は、学校教育のことではなく、「人間の生命が本質的に持つ発達欲求に基き、環境を吸収しながら自ら伸びていこうとする潜在能力を引き出すこと」であると思います。ですから、学校教育については、「今日の教育は社会生活から切り離されている。学習能力が低下すると直ちに成績が悪い学生として片付けられる。関心事は与えられた指導計画を実行することにある。青年たちは大学を出たのに、在学中自分の生きている時代の持つ問題を一つ一つ把握し評価できなかったため、その犠牲となって視野の狭い知性しか持ち合わせないはめになる」と辛辣に批判しています。60年を経た今日の日本でも同じ事が言われていると思いませんか？

就学前の子どもたちについて、「子どもの生命の発達を、家庭・社会・学校(幼稚園や保育園など)がお互いにばらばらでなくもっと統合的に見ていく必要がある。こういう教育観は別段新しいものではないが、実社会ではまだ実行に移されていない」と述べています。今、日本では幼保一元化の流れの中で、「教育」と「養護」という二つの概念で議論されていますが、モンテッソーリが聞いたら、「まだそんなことを言っているのか？」とあきれ返るのではないのでしょうか？ これからの「人間社会を創り出していく活動そのものが教育」であり、その中枢として「子どもの生命をみる教育観」をすえます。

「人間の生命の何たるかを知った上での教育であるべきだ」とモンテッソーリは主張しています。

その考えに照らせば、乳幼児教育の重大さが改めて認識されるところです。

全ての子どもは生まれた時から肉体的にも精神的にも基本的な発達の欲求が保障されなければなりません。家庭も社会も園も一体となって、あまねくそれを提供する義務があります。私達は子どもの心理発達の知識をもっと学び、広めていく必要があります。

モンテッソーリは「子どもが人間の建設者である」といいます。子どもは計り知れない大きな潜在力を持っています。成り行きに任せておくのではなく、科学的にもっと細かい配慮をもってあたるならば、一人一人が更に良い発達を遂げるでしょう。子どもは自分が生れ落ちたところの言語に適応し、生きるために周囲の人間の風俗習慣に適応していきます。これは子どもの発達力が持つ旺盛な自己建設力のなせる技で、子どもはこうして環境を征服し、やがて長じて環境をより良く変形させ進化させていくことができるのです。これは技術やシステムの面ばかりでなく、当然のことながら価値観や社会規範、哲学までも含んできます。まさに人間社会の未来は、出生からの子どもの教育にかかっているといえましょう。

こうした大きな観点から、社会は子どもにしかるべき配慮をする必要があります、子どもの権利を認め、必要とするものを提供する義務があります。適切な援助が与えられて初めて子どもはまともな建設を実現できるのです。モンテッソーリはこれを「血を流さない最後の革命」とよんでいます。

私は本当に今日的課題として、モンテッソーリに共感するところが多いです。そして、乳幼児教育に関わる者として、大所高所のことだけでなく、足元の実践方法を示してくれていることが大きな魅力です。まだまだ微力ではありますが、今後も子ども達の為に、職員とともども最善を尽くしてまいります。

(園長 正岡里鶴子)

マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第3章 成長の時期区分

＜発達 の 4 段階＞

発達過程には様々な時期があり、それぞれに応じた特有の心理があります。肉体的な発達とも深く関連しています。この本では「発達の3段階」となっていますが、今は4つに分けられていますので、ここでは「4段階」として記します。

第1期は出生から6歳までです。0歳～3歳を幼年前期といい、最も激しく変化する大人の流儀ではとても近づけない心性の時です。ニド・ICの時期がこれに当たります。3歳～6歳を幼年後期といい、プライマリーの時期です。知的なものに興味を持ち始め、積極的に取り組んでいきます。第2期は6歳～12歳です。小学校の時期に当たり、子どもは先生のいうことがわかり、聞いて学び取る力がついてきます。心理面でも分別がついてきて道徳観が発達します。論理性や想像力、忍耐力や粘り強さもついてきます。比較的落ち着いて安定した時期で、健康と力を蓄える時期とも言えます。第3期は12歳～18歳で再び激しい変容を迎えます。身体的変化が急速におこり体力の消耗も激しくより多くの睡眠を必要とします。心理的感情的に非常に繊細で傷つきやすく危険な時期でもあります。社会や既成の価値への否定によって自分を再構築しようと大きなエネルギーを費やします。第4期は18～24歳です。大人になり始め身体的にも精神的にも安定してきます。

＜人としての創造期——第1期＞

生涯で最も重要な部分は出生から6歳までの第1期であるといわれます。なぜなら人格や知性等人間としての複合的な精神機能の大元が形成されてしまうからです。子どもは生まれてからわずか数年の短期間で、生きていくのに必要な事項のほとんど全てを、置かれた環境から学び取っていきます。特に言語の獲得は特筆すべきです。どこの国でも子ども達は難しい文法をものともせず、母国語を正しく操るようになります。他にも身辺自立や生活習慣など子どもが学んでいく量は膨大です。こうした子どもの自己建設をモンテッソーリは「ゼロから出発する創造」と言っています。この第1期に子どもがやってのける創造はとてつもなく深く幅広いものであって、一生に大きく関わってきます。

＜ものを吸収する心＞

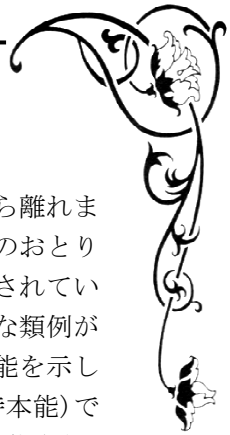
自己建設の作業は、大人の場合は意識的に行われますが、子どもは無意識的に行っていきます。私たち大人にはとうてい無理と思われる膨大な学びを、短期間になぜ子ども達は可能とするのでしょうか？大人が学ぶには記憶力が必要です。論理性や推理力も必要でしょう。では赤ちゃんにそうした力があるのでしょうか？いいえ、それらの能力が育ってくるのはもっと後です。ということは、赤ちゃんたちが環境の中のことを身に付けていくのは、大人とはまったく違った能力によるものだということが推察されます。かれらが持っているのは、私たち大人とは違った知性のあり方なのです。子どもは大人が持っていない優れた能力を持っています。その能力を「吸収する心」と呼んでいます。

「吸収する心」とは、環境を良い悪いの区別なく、あかたも写真を撮るかのようにあるのまま取りこんでいく力のことです。モンテッソーリは「私たち(大人)は知性でもって知識を身につけ、子どもは霊的生命でもって知識を吸収する」と言っています。外界からの体験や印象は子どもの心に不可抗力として入り込み、子どもの心を形作っていきます。(この時期にまだわからないだろうと思って、いい加減なことをしたら後がこわいというものです。脳の深いレベルで蓄積されてしまうのだということを覚えておく必要があります)

子どもの創造はでたらめに行われるのではなく、発達の欲求に従って秩序だって行われます。小さな子どもは盛んに手を使ってさまざまな探索をします。自分が既に無意識の中で吸収したものを点検し、意識の中に導入しなおそうと試みているのです。遊びや作業という形を通して、子どもは意識を持つようになり、「人間」になっていくのです。手と経験を通して人間は自分を創っていきます。手は人間の知性の道具です。私たち大人はこの時期の子どもの独特な発達の秘密を理解し、物を教え込むのではなく、発達作業中の子どもの心に対して手助けをしてあげなくてはなりません。

モンテッソーリはいいいます。「子どもがちゃっぴけな弱い存在だから助けてあげるのではなく、創造の大きな原動力を授けられているからこそ助けるのです」と。

(園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第4章 新しい動き

もとは研究といえば、生物学・人類学・社会学あるいは道徳においても、成人が対象でした。近頃では、もっとも若い生物が視野に入ってきているばかりか、生物の根源に遡って考えるようになっていきます。しかも抽象的推理からだけではなく、観察から生まれたものです。

一人の人間の根源を、発生にまで遡って考えると、そこには成人期には見られないまるで異なるものが姿を現わします。さらに、人がこれまで考えていたものとは全く違ったある種の生命力が浮かび上がり、子どもの人格というものが明るみに出てきます。

成人した人間が死に向かって歩んでいるとしたら、子どもはまさに生に向かって進んでいます。「子ども」というものの全生涯は、力と生命に満ち満ちた新しい人間の建設にあります。子どもは年齢が増すにつれ、ますます知性的で強くなります。子どもにとって、一つ一つを征服し自分を拡大していくこと—つまり「自分でできる!」—ということは、大きな喜びと満足と自信です。一人ひとりの子どもは自分で自分という人間を築いていかなければなりません。誰一人として、この子に代わって成長してあげられる者はいないのです。そして、やがて時が経ち、成人という形を取るようになる頃には、もうその「子ども」は存在しません。

＜二つの生命力＞

まだ自力で身を守ることはできない幼い子どもに対して、大自然は特別の保護を与えています。両親の子どもへの愛です。親は子に対して、自分を犠牲にしてでも護ろうとする気持ちに目覚めます。時には本当に自分の命を捨てることさえあります。子どもはこの強い愛によって護られているのです。大人は、子どもがそばにいるおかげで、「自分自身を他人の為に捧げる」という人間としてもっとも高次元で至難な感情を知ることができるのです。

動物をみても、同様のことが認められます。どう猛なトラやライオンが子どもに対していかに細やかな愛情を示すか、また鳥も危険が近づくと否や飛び去るのが本能的行動であるにもかか

わらず、護るべき雛がいる時は、巣から離れません。中には怪我をした振りをして敵のおとりになり、雛を護る行動をとる例も報告されています。高次の生き物にはこうした様々な類例がみられ、生命力の方向性は二種類の本能を示します。一つは自己保存本能(個体の維持本能)であり、もう一つは子どもの生命を護る本能(種の保存本能)です。ファーブルは「生き物は強力な母性本能のおかげで存命できるのだ」と言っています。生命の存命が、力の闘争だけにまかされているならば、生き物は絶えてしまうでしょう。生き物が存命できる本当の理由、主要素は、親の子どもに対する愛にあります。

このように多種の生き物の生活を研究すると常に二つの生命力と本能が認められます。それを人間の生活分野に持ち込んで考えてみましょう。社会的理由だけでなく子どもが大人に及ぼす影響からしても、もっと子どもの生活を研究する必要があります。その研究は子どもの生命の根源に戻ってやり直さなければなりません。

ここは短い章なのですが、とても示唆にあふれています。モンテッソーリは「新しい動き」としていますが、60年も前に書かれたものです。この時期にそれまで観念論が主流だった学問の世界に、大きな変革の舵取りがされ、今日の学問につながってきたことがわかります。

非常に興味深いのは、私たちは通常、一人の人間の一生をみて「人間には子ども期と大人期がある」としてとらえ、それぞれの特徴をあだだこうだといいますが、「子どもの生涯」と「大人の生涯」をそれぞれ独立的にとらえ、人類史にどういう役割を果たしているのかをみようという視点です。そうすると「子ども期」の単独の重要性が際立ってきます。そして更に再び、「親の子に対する愛」という非常にパーソナルで身近なところに返ってきていることに、モンテッソーリの深い洞察力と卓越したセンスを感じ、魅了されます。

「子どもの生涯」のとらえ方から言うと、子どもというのは二世代(成人としての親の世代と、成人としての自分達の世代)の「大人の生涯」を結ぶブリッジのようなものであることが、より明確です。こうして生命や文化は蘇生し、より発展して受け継がれてきたのでしょう。世の中や親子の関係の見え方が少し変わってきます。子どもへの理解、人間への理解がより深くなったと思われませんか？

(園長 正岡里鶴子)

マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第5章 創造の奇跡

最も興味深いのは発生学です。

初めは存在しなかった一つの生命体は知性や思考力を持つべく運命づけられており、やがて一人前の男女になっていくという事実— 既存するものは無く、生命体は自分で自分を創っていくのです。卵子と精子が結合した新たな生殖細胞は2つに分れ、4つになり、分裂を繰り返してゆきます。ナポレオンからアレクサンダーに至るまで、等しくこうした一つの細胞から創られたのです。

生殖細胞の中には「染色体」と呼ばれる微小体があります。「染色体」の数は、それぞれの「種」によって決まっています。ヒトの場合は46個です。さらにその中には極微粒子が収められています。遺伝をつかさどるものです。私たちは、一見無味乾燥な科学的証明の中に大きな神秘が隠されていることに気がきます。小さすぎて見えないような細胞の中にあらゆる時代の遺伝遺産を含んでいるのです。人間の全経験、人類の全歴史がこの小さな中に集積潜在しているのです。

新しい生命体の創造には全ての遺伝子が関与するわけではなく、一種の競争が行われます。その中で優勢を占めたものが残っていきます。細胞を取り巻く環境によってもその組み合わせは変わってきます。人間一人ひとりが全部違っているのはこうした様々な組み合わせがあるからです。

1個の細胞は分裂を繰り返しつつ、やがて異なった3つの層を形成してゆきます。外胚葉・中胚葉・内胚葉で、ここから建設の全てが進行していくことになります。外胚葉は毛髪や感覚器官・神経系等になります。内胚葉は消化器系・呼吸器系の諸器官等、内胚葉は体全体と筋肉を支える骨格等を作ります。器官を作り始めると同時に、いままでも形状が一樣であった細胞が、それぞれの器官が果たすことになっている機能に応じて、大きく変化をしていきます。「細胞の特殊化」が行われるのです。肝臓の細胞は六角形でタイル張りの床のようです。骨の細胞は楕円形で細い繊維で連絡されています。神経細胞はきわめて長い繊維を持ち、電信線のように遠くまで伸びています。それらの異なった形の細胞は、源は全く同じ一個の細

胞から生じるのですが、特定の器官の目的にしたがって変形し、もう二度と変わることはありません。各器官は特殊化した細胞によって作られ、それぞれに他の器官とは異なった機能を持っています。異なってはいても、各々の機能は全て体組織全体の健康を保つ上で必要です。そこで、各器官は全体のために存在し機能するということになります。

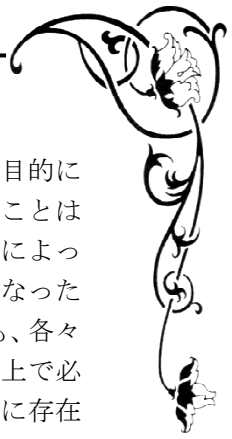
各器官の機能上の結びつきは二つの大きな組織によって安定したものとなります。血液循環系と神経系です。血液循環系は、体のあらゆる部分に運ばれる物質が流れている川に相当します。供給者としてだけではなく、回収者としても働きます。神経系は感知した情報を脳に集中させ、脳からの指示命令を全組織の隅々にまで伝達するものです。

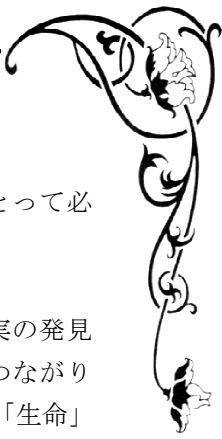
これらのことを人間の社会に照らし合わせてみると、類似したことが見受けられるのではないのでしょうか？ 未開社会では一人が何役もこなしますが、社会が進化すると仕事は分化し、特殊化してきます。各人が一つの職を選びそれに携わるようになるわけですが、その職に必要な技術を獲得するというだけでなく、その特定の仕事に適した独特の心理的性格を身に付けるということになります。それがその人の人生観にもなっていきます。

また、私たちの社会でも、ある種の循環系が発達しています。色々な人や民族によって作られたものが、商業の大河に乗って他人や他民族のところへ届けられます。人間社会では、神経系の特殊化した細胞に相当するものがないように思います。今日の危機をはらんだ世界からすると、人間の体を指揮するこの器官に相当するものが、社会においてはまだ未発達だといえましょう。他を指揮しようとする者は、自分自身を変形させなければなりません。特殊化と機能の間に見られるこの原則は、私たちに大いに考えさせるものを含んでいます。

発生学自体は相当に進んでしまいましたが、この当時、人間社会に重ね合わせながら洞察しているところにモンテッソーリらしさを感じます。

(園長 正岡里鶴子)





マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第6章 発生学 ——行動

胚の形成期の初めの段階では、どれがどの動物の胎児なのか混同してしまいそうなほど、互いによく似ています。それぞれの胚は、先行する全ての動物の遺伝段階を経るわけですから、その胚は種(しゅ)の進化の総合を表していることにもなります。「個体発生は系統発生を繰り返す」というわけです。互いに似通った経過を辿りながら、爬虫類、鳥類、哺乳類そしてヒト、が出てくるとは全く神秘的なことです。動物間の相違を形成する四肢・胴体・歯等の形状は、その動物が環境の中でどう行動するかに結びついています。胚がまだ諸器官をはっきりと作り上げていないうちは、容易にその器官を変形させ得るという事を人間は発見し、その結果、無針でより多くの蜜を集めるミツバチ、沢山の花や実をつける植物、滋養分が高く有毒素が取り除かれた根菜等が作られました。

人間の精神発達も同様になされると考えるならば、早い時期に人間の精神形成を助けることができると考えます。精神の領域においては、私が、「ものを吸収する心」と呼んだものの働きによります。諸器官はその時々に見れる特殊な「感受性」により、発達を遂げます。例えば、視覚・聴覚に関するもの、歩行や言語の獲得に関するもの等に対する特殊な感受性(能力)です。それらは、膨大なエネルギーを持って、ある一定期間子どもを強烈に活動に導き、能力或いは器官を完成させていきますが、「その時」が過ぎると消えてしまうものなのです。神経中枢は脳の中で先行して発達していきますが、各器官の発達、やや遅れて環境の中での行動計画に従って形成されていくといえましょう。器官が全て出来上がると、次には連合して精神の調和とよぶものが形成されていきます。

生命の目的は、自然界の総体に向かうもので、普遍的なものであると考えます。そこに生ずる秩序から、自分の存在に必要な要素を全ての生物が取り入れるのです。生命は、単に自らを保存するために地上にあるばかりでなく、一つひとつが地上における総体としての創造に不可欠な作業をするためにあります。

したがってその為の作業は全ての生物にとって必要なものなのです。

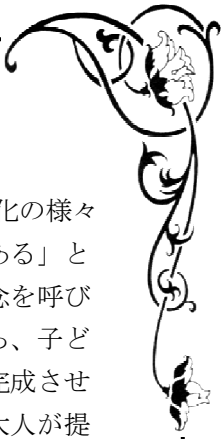
こうしたそれぞれの分野での新しい事実の発見は、私たちの生命理解を深めることへとつながります。私達…子どもの教育に携わる者は、「生命」というものに手を貸しています。成長期にある子どもの発達を考えた時、適応・遺伝などによって説明するだけでは足りないことに気付きます。もう一つの力の存在です。それは生命が、お互いの間の全ての営みの調和を取ろうとする力を持っているということです。子どもの目的とは、まさに成長することですが、子どもが、個体として創造や完成に向かって発達していくことと、そしてもうひとつ。全体の調和をなす為の役割が、子どもにはもともとあるということです。

子どもは、自分を取り巻く環境から特質を取り入れて発達していく能力を、自らの内に持っています。生命体は自分で自分を作り上げるのであって、既に出来上がったものが存在するものではありません。赤ちゃんは無力で空っぽの無意味な存在と考えられていました。しかし、子どもには世界共通の「人間の創造性」という能力が存在するのです。自分の属する時代と文明に合った人間を形成するようになっていく本性です。最も文明に取り残されたある地域で取り残された赤ちゃんが、フランスの施設に収容され養育された結果、彼女はヨーロッパの言語を二ヶ国語話し、西洋流の風習を身につけ、大学で生物学を専攻しているという報告がありました。石器時代から原子力時代へ。生まれてきたばかりでは、人は苦勞なしに無意識的にそのような奇跡を行うことができるのです。

人は自ら場所や環境を選んで生まれてくるわけではありません。人は等しく生まれおちたところの環境に適応し、自らを発達させていくという事実が、人類は一つであることの真の証拠として、私達の心を打ちます。

この時代の学問の息吹きと、二度の世界大戦をくぐり抜けたモンテッソーリらしい奥深い洞察を感じます。

(園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第7章 精神的胎児 (1)

人間には、二つの胎児期があります。一つは通常の母体内における出生前のもの。もう一つは人間に特有な出生後のもので「精神的胎児」といっています。人間が地球上において特殊な存在であることの証しは、精神や創造的知性を持つことだと思いますが、その面において人間は未発達のまま生まれてくるので、出生後に精神的胎児期を過ごすのです。精神面からの全発達過程の研究は、この精神的胎児のところから始められなければなりません。最も重要な配慮は、新生児の精神生活に向けられる必要があります。

適応性に富む子ども

子どもは発達過程で、置かれた環境の状況に応じて、人間としての自分の存在を築き上げます。大人は見たものを意識して記憶し学習しますが、子どもは環境をそっくりそのまま完璧に自分の生命の中に吸収していきます。これが子どもの特性です。この特性は子どもの言語獲得を思い起こすとよく理解できます。何も知らない生まれたての子どもは、やがて複雑な文法体系を持つ母国語を話すようになりますが、それが意識的な暗記や練習や訓練によるものでないことは明らかです。純粋な記憶活動とは全く違った形で、聞いたものが体に染み込んだ後、再現されてくるのです。これは子どもの心理特性がなせる業であって、大人とは決定的に違っている能力なのです。

この能力を使って、人生の第1期は極めて特殊な「適応の時期」とであると言えます。子どもには、環境にあるもの全てをえり好みなく吸収する特殊な感受性があるので、どこでも適応が可能になります。子どもは、そこがどこであれ、生まれ育った所を非常に愛するようになり、それ以外の所では幸せや心の安らぎを感じないほどに適応しきった状態になるのです。この能力のおかげで、私たちは自分が属する国や民族が持つ典型的な慣習や心性を獲得していきます。人間を形成し適応させるという点で、子どものこの吸収形態ほど重要なものはありません。成人の場合の適応とは、全く異質なものです。

そこで、「子どもは歴史の色々な相と文化の様々な水準とを結びつける結合点、連結環である」と考えます。人間社会の新しい価値ある観念を呼び覚まし、悪しき因習を変えようと思うなら、子どもを手段とすべきです。人間性の建設を完成させるのは子ども達であり、子どもは私たち大人が提供する素材でそれを完成させるのです。無限の可能性を持っている子どもはやがて人類を変えていく力を持ち、その意味で、子どもは人類の創造者です。より深い理解とより大きな安寧とより高度な精神性を人類にもたらすために、教育を通して多くのことができるに違いありません。

精神的胎児の生活

生まれたばかりの赤ちゃんを想像してみてください。母体とは全く違う環境にいきなり出て来るのです。今まで一度も働かせたことのない機能を使い、次々に押し寄せてくる初めての体験を乗り越えていくのは、言葉に言い表せないほど体力を消耗させることでしょう。私たちはともすれば、母親の側に向けて色々と心配や気遣いをしますが、赤ちゃんに対しては主として医学的な意味の関心を払うに留まりがちです。しかし、例えば意識的でないにせよ、一種の精神感情は存在するはずで、赤ちゃんが下意識の中で恐怖を感じ得ることを、私たちは忘れてはなりません。

そして一方では、困難性ばかりでなくこの時期に一種の潜在能力がめざめ、それが後に子どもすなわち精神的胎児を大きな創造の活動へと導いていくのです。私たちは、誕生の精神的ショックを考慮に入れるべきであると同時に、まぎれもなく存在する赤ちゃんの活動的要素を始動させることも、しっかりと考慮にいれなければなりません。この両面が、精神的胎児である子どもの生活です。そして、社会生活を吸収することを通して、自分自身の社会集団の特性を定着させなければならないのです。

この本の題名は日本語で「創造する子ども」ですが、原題は”The Absorbent Mind(吸収する心)”といえます。繰り返し繰り返しテーマが語られ、深められていきます。
(園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第7章 精神的胎児 (2)

誕生と発達

新生児は、これから「人間」としての全てを築いていかなければなりません。人間の建設の最も大切な部分は精神面にあるといえます。運動器官は成熟度を増していくにつれて、徐々に精神の命令に従うようになります。精神は運動器官を働かせ、環境を通して沢山の経験を取り入れます。経験と運動を通して、動作の協調が生じ、遂に意志通りに働くようになるのです。高度な職人や芸術家、スポーツ選手等に、その最たる姿をみることができます。環境からの経験を通して、人間はみんな自分の能力の創造者になるのです。

人間は生まれたばかりの時は他の動物に比べて、本当に無力な存在ですが、実は多様で困難な活動を行うに至る潜在能力を最も備えた生き物です。精神発達は、潜在能力の発現とも言えます。潜在能力は個人により多種多様で、乳幼児期にまだ私たちは一人ひとりの到達点を見抜くことはできません。ですから、この時期には生命の発達にたいする手助けをする事に意を配ることになります。「発達する人間の本性」に従うための指標は、子ども自身が示します。すなわち、「穏やかで幸せそうな意志表示」とか「一生懸命努力を傾ける様子」とか「あくまで自由選択を行おうとする態度」などです。私たちは子どもを観察することから、それらを見て取ることが必要です。

心理学者は短いながら決定的意味を持つ誕生期とその後の発達期を分けて考えます。その位誕生期は特殊であり且つ危険なのです。「分娩ショック」は一種の退行現象を引き起こします。子どもを幸せにするはずのこの世のあらゆるものが、赤ちゃんを驚かせ恐怖を与え嫌悪感を起こさせるのです。これは下意識の心理に入り込みます。全く感じもしなければ思い出しもしない下意識の印象が、深いところで刻まれます。分娩・誕生・新生児期の重要性和危険性を十分理解し、特別な配慮が必要です。

「星雲」

子どもの「潜在能力」が発現されるしくみについて、「星雲」という考え方を打ち出しました。天体の星雲は、一つひとつの粒子は離れていて一貫性はありませんが、遠く離れてみると一つの天体として構成されています。人間の精神構造の中にもたくさんの星雲のようなものがあるというわけです。例えば「言語の星雲」から、子どもは自分の中に母語を作るための刺激と指示を受けます。言語の星雲エネルギーのおかげで、子どもは話し言葉の音声と、他の音声や騒音を区別します。言語のパーツとして吸収されたものはある程度たまったところで、言語としての体系をなしていきます。星雲の形が見えてきました。子どもをその民族の人間にまで仕立て上げる社会特性についても同様のことが言えます。

星雲は、子どもの環境に対する適応機能、社会行動の再生等を司っています。星雲は、遺伝によって行動を決めているわけではありません。星雲はどのように行動するべきなのかを、環境から吸収する力を子どもに与え、形にしていくのです。

何らかの理由でこれらの星雲が働かなかったとしたら、社会適応が困難になることが考えられます。「分娩ショック」が絡む心理学的退行減少は、環境を拒否し、その為に「環境に対する愛」と呼ばれるものの発達がおこらなくなります。環境の中で次々と自己を実現していくことができる原動力となる、その愛の力が発達しないのです。

感受性の星雲が新生児の精神発達の指揮をとります。精神特性が目覚めるまでの短い期間、特別な配慮をするという気配りを、新生児に対して払いましょう。賢明な母親や家族にとって特に必要な原則というものの重要性をはっきりさせておきたいと思います。出生時と生後間もない頃のための正しい配慮のいきとどいた「特定の基準」があると考えます。

(園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より
第8章 自立の達成

子どもははっきりと自立を目指す傾向を示します。それは子ども自身の内部から湧きあがって来る力で、誰にも止める事はできません。これを「ホルメ(生命衝動)」といいます。

初めに機能を開始するのは感覚器官です。子どもは感覚器官を通して、環境のあらゆるものを食欲に吸収します。一方、消化酵素、乳歯と離乳の準備も進みます。母乳なしで生きられるということは、自立への大きな一歩です。初めての音節の発声も聞かれます。言語獲得へのきざしです。他の人との意志の疎通は、自立への大きな力です。一歳前後になると歩き始めます。「歩行の獲得」は極めて重要です。脳と神経、骨格と筋肉など様々な要素の発達と連携が必要です。二足歩行により子どもは移動の自由を得るとともに、両手の自由を得て、ここで明らかに他の動物とは違った一段上の経験の段階に達します。

心理面でも大きく変わります。精神的自立の練習が始まるのです。子どもは自分の意志で行動したがるようになります。自分で物を選び、自分で服を脱ぎ着し、自分で物を食べたがります。子どもは自分の内に大きな生命衝動を持っていますから、大人が子どもの行動を抑えようとすると、とんでもない頑固な抵抗に遭うことになります。子どもは他人の経験ではなく、自分自身の経験を通して自分の精神を発達させようという傾向を持っています。環境の中での経験を通してながら、子どもは物事の意味や理由を探究します。この経験を私たちは「作業」と呼びます。これを積み重ねながら、子どもの個性は作られていきます。これはとても重要な事であって、その為には子どもの自由が保障されなければなりません。

独立(自立)獲得の目的は何でしょうか？それは個性に源を発していると思われます。つまり、自分とは何か？自分は何をしようとしているのか？そして、自己完成へ向かっていく人間の生命の姿です。どのように子どもは自主独立を獲得するの

でしょうか？子どもは自分の自由をどのようにして実現するのでしょうか？継続的行動と継続的努力によってです。

大人たちがしばしば思うように、他人に働いてもらい自分は休息し楽をすることが、もし人生の理想だというのなら、子どもが示してくれる事実は全く違っています。子どもは作業を通して、肉体的精神的独立を求めます。そうすることで生き生きとし、幸せを感じます。子どもは自力で学び取りたいと欲し、経験したいと願い、自分自身の努力によって世界を理解したいと望んでいます。それが生物の生きている姿です。阻止しようとするならば、それは退行の原因となりましょう。創造においては全てが活動です。活動の集まったものが生命であり、活動を通してのみ生命の完成へ到達されるのです。それが自然の姿です。

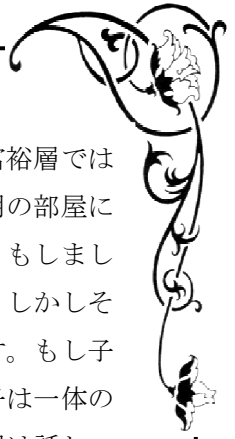
環境に適応する手助けをしてもらえず、環境や活動に対して嫌悪感を抱くようになった子どもは退行現象を示し、様々な教育上の問題が持ち上がってきます。私たちは発達が活動を通してなされることを知っていますから、環境は活動に興味を湧かせ、自分で経験させるように仕向けるための動機に富んだものでなければならぬと考えます。無気力から作業へ！それが治療のとり道です。

成熟の概念

成熟という通常「生物学的成熟」について語られますが、「心理学的成熟」も考慮にいれなければなりません。精神の成熟に関して言えば、支配的な力を持つのは環境であり、その中での経験です。成長と精神の発達を方向付ける構造は、「ものを吸収してやまない心」と星雲と感覚期の三つによって導かれます。それらはそれぞれに遺伝によって引き継がれ、人類に特徴的なものです。しかし、それぞれの働きは、環境の中での自由な行動を通して、初めて現実のものとなり得ることを再度強調しておきたいと思います。

観察を通して得た、モンテッソーリの生命体の一つとしての人間観が語られています。モンテッソーリ教育の土台を成す部分です。

(園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第9章 新生児への配慮

新生児を取り巻く環境を、その子が吸収しやすいように配慮し、退行傾向を発達させないようにすることが大切です。赤ちゃんが初めて入ってきたこの世界から、拒絶されたと感じるのではなく、惹きつけられるように配慮しなければなりません。生後1年間の間にも様々な時期があり、それぞれに特別な配慮が必要です。

第1期は短いですが、新しい世界への突入期です。赤ちゃんは出生後数日間ではできるだけ多く母親と接触を保たせておくべきです。分娩で赤ちゃんは胎外に出てきますが、母子二人の関係は心理的にはまだもとのままで、常に連絡が取れ合っていると考えていいでしょう。母親は赤ちゃんが慣れ親しんできた「力」を持っていますから、適応の困難に立ち向かうための大きな助けになってくれます。温度、明るさ、音、着る物や触れ方なども胎内の環境を想像し、そこから徐々に適応していけるよう配慮します。しかし、この特別な配慮は乳児期全般にわたって必要なわけではありません。少し時間が経てば母子ともに社会的な世界へと入っていくことができます。

第1期を過ぎると赤ちゃんは何の抵抗もなく、環境に静かに適応していきます。まだ四肢が意志通りに動かせない赤ちゃんの最初の活動は、五感を通して環境からの印象を吸収することです。人間の場合、他の動物に比して、吸収する範囲は広範で、あらゆるものを吸収し取り込みます。これらの印象が精神の本質的部分にまで浸透し発展するのはです。子どもは、環境にあるものから受ける深い印象(特に生まれて間もない頃の印象)を手段として自分自身を築きます。そして環境に適応します。子どもに対して機能的な作業にふれる機会を与えたいと思うなら、環境の中に活動への動機付け(誘うもの)を準備していかなければならないという考え方を容易にご理解いただけるでしょう。

乳児死亡率が高かった時代、西欧の富裕層では衛生上の理由から赤ちゃんは子ども専用の部屋に入れられ、病院がそのモデルとなったりもしました。また、乳母に任せたりもしました。しかしそれらは、正常な成長と発達を阻害します。もし子どもを援助したいのなら、授乳期、母子は一体のように行動します。街を歩きながら母親は話し、子どもは母親がすることの全てを眺め、聞いています。二人を結びつける授乳と愛情が環境に対する自然な方法で適応という問題を解決してくれます。例え意識的に把握できなくても、下意識で印象を獲得し、それがこれから成長する上での助けとなります。子どもが特定のものに興味を示したのなら、心ゆくまでそれを味あわせてあげましょう。

母親が赤ちゃんとともに行動する為には、民族によって首からつるしたり、おぶったり、バスケットに入れたり、様々な方法があります。そして、授乳期を長引かせる習慣は多くの国で見られます。1年半、2年3年というところもあります。しかし、これは子どもの要求とは関係ありません。既に別の食べ物で栄養をとれるようになっているからです。母親が子どもを離したくないためと、共に在ることで子どもに自分を通しての社会環境を与えてあげたいという願望があるからでしょう。

赤ちゃんが泣き叫び、不機嫌の発作を起こすのは、精神的空腹による衰弱を患っているからだと言います。もっともな話です。狭いところに閉じ込められて、自分の力が出せない状態が長く続くと、赤ちゃんは精神的栄養失調状態になってしまいます。赤ちゃんを孤独から抜け出させ、広い社会的環境に入れてあげることが唯一の治療法です。世界中の多くの民族が無意識的に自然な方法で行って来ました。私たちは熟考と知性によって、それを理解するとともに、意識的に応用すべきです。

(要約文責: 園長 正岡里鶴子)

【新しい読者をお迎えして】 当園では0歳から6歳まで一貫した保育の基軸として、モンテッソーリ教育を行っております。開園以来5年を経て、保護者の皆様のモンテッソーリ教育に対する評価と期待が非常に高いことがわかりました。そこで昨年、奥深いモンテッソーリの世界をご紹介します、子育ての一助となることを願ってこの講座を開きました。マリア・モンテッソーリの「創造する子ども」(エンデルレ書店)を共に読み解く形で進めていて、今9章まで進んでいます。今回は、新入園児の保護者の方を多数お迎えしたので、第1回目のモンテッソーリ小伝を再掲するところから始めたいと思います。

(園長 正岡里鶴子)

第1回 マリア・モンテッソーリ小伝

(1) 生い立ちから

マリア・モンテッソーリ(1870-1952)は、イタリアのキアラヴァレで生まれました。謹厳な父と信仰深い母を持ち、ずば抜けて勉強ができたわけでもないけれど、幼い時から上品で自尊心を持ち、品位を重んずるよう躾けられ、恵まれない人々のために労することや、友達に対して優しく思いやりが厚かったといわれます。14歳頃から数学や生物学に興味を示し、やがてローマ大学医学部に合格しますが、当時は女性が医学を志すことは社会の慣習に反し、父の大反対で経済的援助を絶たれてしまいます。しかし信念を貫き様々な困難を乗り越え、イタリアで初めての女性の医学博士となりました。

(2) 知的障害児教育から、健常児教育へ

卒業後ローマ大学附属精神病院の助手となり、たくさん知的障害児と関わる中「医学的な問題というよりは教育的な問題にある」ことに気付きました。そのための教育施設を設置することを訴え、実現した施設で2年間の実践を行い多くの成果をあげ、ここで得た理論と方法は健常児にも適応できるという確信を得ました。その後ローマ大学や女子師範などで教鞭を取る一方で臨床に携わり、研究と実践経験の両面を積み重ねました。

(3) モンテッソーリ教育のはじまり

1907年、ローマのサン・ロレンツォに初めての「子どもの家」を開きました。貧しい人たちの住むスラム街で、およそ3歳から6歳までの子どもが60名ほどでした。野放し状態で荒

れていた子ども達の「手」に「教材」を与えることによって、子ども達は大きく心の成長を遂げていきました。「お仕事」の始まりですが、何よりも大きなことはそのことによる「子どもの心の内面でおこる変化」への気付きでした。モンテッソーリは医者の観察眼をもって子どもの行動から学び、これを発見したのです。そこでの成功は、その後モンテッソーリ・メソッドとして世界中で受け入れられていきました。

(4) 遠大なモンテッソーリの哲学へ

モンテッソーリの生きた時代は日本では明治から大正・昭和にかけてであり、世界は二度の大戦を経験した正に激動の時代でした。自由を謳歌すると同時にファシズムの台頭を目の当たりにし、インドに亡命しました。そこでの東洋哲学との出会いによって思想的に大きな影響を受けたようです。こうした背景の中、モンテッソーリは平和を希求し、宇宙的な規模の中で人間生命をとらえ、その存在意味を問うていきます。これは「コスミック教育」と言われ、遠大な教育プログラムです。

モンテッソーリが投げかけた課題は実に今日的で、没後半世紀以上経った今尚、我々の考えている教育は未だモンテッソーリに追いついていないと言わざるを得ないのではないのでしょうか？その教育はまさに、私たちの目の前にいる赤ちゃんから始まるのです。

＜参考文献＞マリア・モンテッソーリ/リタ・クレマー/新曜社、モンテッソーリ教育学入門/市丸成人/学研、人間らしき進化のための教育/マリオ・M・モンテッソーリ/ナツメ社、なぜいまモンテッソーリ教育なのか/ポーラ・ボルク・リラード/エンデルレ書店、モンテッソーリの教育・6歳から12歳/マリア・モンテッソーリ/あすなろ書房、モンテッソーリ子どもと学校の危機/G・シュルツ=ベネッシュ編/エンデルレ書店他

マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より
第10章 言語について

言語は社会生活の基礎です。生きていく上で、人間はお互いに調和を取っていかなくてはなりません。その為の相互理解を可能にする手段が言語です。ただの音声の意味を持った時、それは言語となり、その意味を理解する人達で一つの集団が作られます。人間は言語によって、国籍よりもさらに強く一つに結びつけられることができます。言語は、人間の思考が複雑になるにつれ複雑になり、人間の思考とともに成長します。

無数につながりあう音素と、一定のルールに従った語の配列—この高度に抽象的で複雑な言語というコミュニケーションの手段を、人間はどのようにして獲得し、受け継ぎ、発展させてきたのでしょうか？それは子どもの「理屈抜きに吸収する力」があったからだと考えます。子どもはどこの国のどの言語においても、音節しか発音しない時期を経て、単語全体を発音するようになり、ついにはあらゆる構文と文法を完全に使いこなすまでになります。子どもの言語発達には大変興味引かれます。（言語教育に対してではありません）

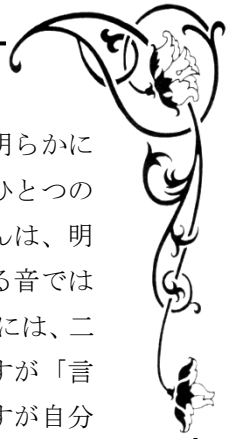
子どもが色々な言語音を調音するのを観察すると、いくつかの法則に従っている事が分ります。私達成人は外国語の全ての言語音を把握できませんし、再生する事もできません。しかし、子どもだけは、自分の身近で使われている言語が何であれ、その言語の機構を築いて完全に話すことができます。鼻腔、咽頭、舌や頬の筋肉等色々な部分の調節が必要ですが、母国語獲得のために一致協力して見事に調整されていきます。子どもの言語機構は意識的作業の結果として築かれるのではなく、無意識のはるか奥深くで成され、そして永久獲得物として定着されるのです。特に印象深いことは、あらゆる言語において、それを構成する言語音はその純粋性を一つの世代から次の世代へと保存するという事実。もう一つは、複雑なものであっても、単純な言語と同じように容易に吸収されるという事実です。それはあ

たかも、写真が1人であろうと1000人であろうと何の苦もなく、一瞬でその像を撮ることができるのと似ています。

子どもを観察すると、内面の発達と外面への表出の間には大きな時差があることが分ります。例えば、赤ちゃんが「マンマ」という単語を初めて口にしたとします。次はどんな言葉をしゃべるかと期待するのですが、なかなか後が続きません。しかし、ある時期がくるとどの子もいきなり完全に単語を発音する段階に飛び込みます。それまで外から見えなくても内面において、十分な蓄積と準備が進められていたのです。2歳の終わり頃には、子どもは休みなくしゃべってしゃべってしゃべりまくります。2歳以降も続き、こうしてその子の属する集団の精神構造と言語表現機構が作られていきます。2歳半位を境として、言語の組織における新しい時期が始まります。この二番目の時期は、大体5歳から6歳位までに渡ります。この時期に子どもは莫大な数の単語を身につけ、文の組み立てを完成させていきます。この時期に洗練された言語と豊かな語彙のある環境に生活すれば、子どもはそれらを全て自らの内に定着させられるでしょう。ですから環境は特に大事です。

二重の道が取られている事を私達は記憶に留めなければなりません。言語を準備する無意識的な活動と、その後の意識的なものの二つです。言語を創造するのは「人間」に他なりません。子どもは言語を自分で獲得しました。万が一、子どもにこの能力がなくて、言語をすずんでマスターしなかったとしたら、これまで人間が世界で成し遂げて来た仕事などなかったでしょうし、文明も発達しなかったでしょう。そう見るのが、子どもに対する本当の見方であって、子どもが全てを築くというところに重要性があります。従って文明の基礎を築くのも子どもです。子どもが1人ぽっちで手探りで進んでいかなくてもすむように、私達大人が必要な手助けと道案内とを与えてやらなければならない理由もこのあたりにあります。

（要約文責：園長 正岡里鶴子）



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第 11 章 言語の呼びかけ

言語に関する中枢は二つあります。一つは「聴覚」中枢で言語を聞くための器官(耳等)、もう一つは運動中枢で言語を発するための器官(口、のど、鼻等)です。耳は極めて繊細で複雑な器官です。耳の中心部はまるでハーブそっくりです。高低 64 弦が色々な音を振動できるようになっています。その前には太鼓があって、たたかれると弦を振動させて聴覚は言葉の音楽をとらえるのです。感覚の中で聴覚の発達はや遅いといひます。私は新生児の聴覚は遅いではなく、逆に深い集中一つまり言語中枢に感受性を集中させているのだと思ひます。特に「言葉を集める」という事に集中しているのではないのでしょうか？この特殊な聴覚機構は特別な音、すなわち「話し言葉」だけに反応して作用するというすばらしく有能な力を持っているらしいのです。言語獲得のための特定の機構が存在する事を示し、言語音だけが発語するための調音機構を働かせる力を持つという事を力説しておきたいと思ひます。人間が他の動物と違ふ点は、言語そのものを持っている事の前に、自分の言語を創造する機構を持っているという事ではないのでしょうか？それはこの世に生まれ出てくる子どもによって、引き継がれていき、新生児の記憶素の中に定着するものが、恒久的性格を持つのです。

言語は無意識に子どもに定着します。まず最初子どもの下意識で数々の単音が定着しますが、これが母語の本質的な部分です。それから音節、ついで単語と続き、ついに文法体系に入ります。こどもはどの段階においても、なんと勤勉に正しく学び取る事でしょう！これは本当に奇跡的にすばらしい事だと言えましよう。最初のたった 2 年間でこんな小さな生命体は全てを学び取ってしまうのです。でも、この事の価値に考えをめぐらす大人は少なく、みんな学校に行ってから子どもが習ってくる事に対してのみ興味と満足を示します。

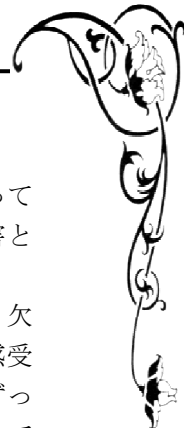
赤ちゃんは話している大人の唇の動きをじっと見ていて、その動きをまねようとしています。6 ヶ月

くらいになると「バ…バ…マ…マ…」と明らかに音節単位の音を発します。これは大きなひとつの到達点です。10 ヶ月位になると赤ちゃんは、明らかに人間の口から発せられる音は単なる音ではないということを見出しています。1 歳頃には、二つの大きなことが起こります。意識下ですが「言葉を理解した」という事と、まだ喃語ですが自分なりの「意図的な」単語を発するという事です。子どもは言語が自分を取り巻く環境に関わりを持つことにはっきり気づき、その言語を意識的にものにしたいという願ひがいよいよ大きくなります。1 歳半頃、子どもは別の事実を見出します。物にはすべてそれ特有の名前があるという事です。これは子どもが様々な言葉の中で、名詞、特に具体名詞を識別できたことを意味します。子どもの周囲には様々なものが存在しますが、いまやそれらのものは言葉によって示されたのです。混沌とした世界の整理付けが始まり、知能も一気に伸びていきます。しかし大人たちには、1 歳から 2 歳の間に子どもの内面で起こっている事の重大さがまだ十分に理解されているとは言えまません。

この時期、子どもの内面では言語だけでなく色々なことが起り、子どもは自分とも大人とも戦い怒ります。子どもの激しい苛立ちは何がなんだか訳がわからないものに映りますが、私達大人だって自分のしたいことが出来ず、言いたい事が相手にきちんと伝わらない時、イライラして大声を上げたくもなるでしょう？この小さな理解されない人間である子どもにも同じことが集中的に起こっていると考えましよう。彼らは言語を獲得し、自分の新たな秩序を築き、自立への道をたどろうとしているのです。

子どもの心の要求に従った環境の必要性をもう一度主張しておきます。子どもを孤立させておかず、大人とともに生活させ、明瞭な言葉遣ひのより良い言語を頻繁に聞く機会を持たせること、又聴く事が私達大人の責務だと信じています。

(要約文責： 園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第12章 障害とその影響

子どもの隠れた性向をよりよく理解する為に、心の内部の感受性の問題に触れてみましょう。

これまで言語の発達について述べてきました。子どもの言語は2歳を過ぎる頃から文となり、やがて思考の爆発へとつながります。しかし大人にとって子どもの拙い言語を理解するのは大変難しく、理解されないがゆえに子どもは怒り苛立ちます。「怒りと苛立ち」はこの時期の子供の特徴です。子どもは話す能力を獲得するという事で、更に大きな自立へと向かうことができるのですが、それは労苦の多い道のりであり退行の危険をはらんでいます。これは生後2番目の適応困難期です。(1番目は出生直後であることは既に述べました)

この創造的な時期のもうひとつの特徴は「印象」です。子どもはこの時期の獲得物(印象)を全生涯に渡って保持しますから、マイナスの効果もまた一生続きます。なんらかの逸脱した心理特性が形成されるわけで、これらは成長するにつれて表に表れてきます。成人に見られる欠点や弱点は、多くがこの時期に端を発しています。

正常な発達を妨げる障害は「抑圧」として理解されます。例えば言語面における例を見てみましょう。発語器官は全く正常であるのに、3歳或いは3歳半を過ぎててもなかなかしゃべらないという場合があります。「心理的無言症」といわれますが、いきなりしゃべりだす事もしばしば見られています。子どもの内部では既に準備はされていたのですが、何らかの心理的障害によって、表出することが妨げられていたのです。自由な活動が認められたり、志気を高揚させる環境におかれたりすることで、表現能力が突然姿を現してきたのです。大人でも話すのに困難を感じる人がいますが、心理的障害の遠因は乳幼児期の言語の獲得期に遡ることが多く見られています。能力の獲得期には、それに対応する退行期が伴っていることを忘れてはなりません。

退行現象は子どもの感受性に関係しています。子どもは自分を創造し可能性を拡大する目的があるために、ものを受け入れる事に敏感です。

しかしその大いなる感受性は、大人にとって些細に思われることでも、とても大きな障害と感じられてしまうことも引き起こします。

妨げられた感受性の結果が、後に一生継続する欠陥として定着してしまうのです。子どもの感受性は、私達が頭で考える程度よりもずっとずっと大きなものですから、常にそれを頭に入れておかなければなりません。

子どもの前に障害を置くのは大人である私達ですから、子どもに生涯つきまとうコンプレックスに対する責任は私達にあります。子どもに接するには、できるだけおだやかにしましょう。私達は自分の厳しさや激しさに気付いていない場合がよくあります。自分自身に警戒しなければなりません。教育の準備とは大人が自分自身を研究する事から始まります。一個の生命の手助けをすると言う事は、単なる知識の準備をはるかに超えた人格の準備であり、精神の準備です。静かではあるが冷たい決め付け的な緊張感に対しても子どもは敏感です。

私は長い間、子どもの「通訳者」になろうと心がけて働いてきました。子どもを助ける通訳者は子どもと心底から親密な関係になります。愛情よりも一段と高次元な関係です。なぜなら単なるなぐさめではなく、援助を提供するからです。乳幼児と接する先生の仕事は非常に貴いのです。人間として生きる上での精神発達と人格形成の根底となる重要な部分に協力するのが先生の任務です。先々劣等な個人をつくることになる逸脱や欠陥が子どもに植えついてしまわないように、教師としての任務をはたさなければなりません。そこで以下のとおり、明記すべきです。

- (1) 生後2年間の教育が全生涯にわたって重要な意味を持つ。
- (2) 子どもは大きな精神能力を授けられているのに、我々はそれにいまだ気付いていない。
- (3) 子どもは極めて繊細な感受性を備えているため、いかなる形の厳しさ激しさであれ、それが元になって反動ばかりか、人格に永久に後を残す欠陥を植えつけてしまう。

(要約文責： 園長 正岡里鶴子)

マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第 13 章 運動と全体発達

今回は運動について考えてみましょう。

まず神経系の組織を見てみると、第一に脳があります。第二に感覚器官、これは様々な印象を脳に伝達するために情報を集める役目です。第三が筋肉です。神経はこれらをつなぎ、筋肉にエネルギーを伝達して運動を起こさせます。動物を観察してみると、ただ運動を通してのみ、自己表現をすることがわかります。人間も同じです。(この場合の運動とは、いわゆる体育のことを言っているのではありません。歩く・持つ・話す・書く等を含めた全ての筋肉の動きのことです)神経系は全ての部分が一つになって人間に環境との関係を保たせています。神経系なしには、個人と環境、或いは社会との関係も存在しないでしょう。運動は精神作用の最終到着点といえます。運動は個人に留まらず、深い目的に向かいます。運動の真の目的は、生命全体と世界の精神的普遍的調和に仕えるところにあります。精神作用は人類固有の大きな財産ですが、私有のものではなく、宇宙全体の秩序の一部として、万人と万物全体のために使われるべくしてあるというのが、私の考えです。

子どもは肉体面も精神面も等しく発達させなければなりません。人間の運動行為は、中枢と調和がとれていなければなりません。子どもは運動を通して知能を発達することが証明されています。運動が心理発達を助け、その発達がまた別の運動と行為になって現れることを繰り返すのです。脳に指揮されている筋肉は随意筋とよばれ、意志の力によって動きます。できるだけ調和のとれた運動に到達するには随意筋の調整が必要です。子どもは、環境中での実際に動き回り、経験積み重ねることによって、自分の動きを創り出し、完成させていきます。動物たちは限定され固定した動きをしますが、人間は自分の動きを指揮し制御できます。しかし、そうなるには、意志力と練習の繰り返しが必要です。意志は精神の最大表現の一つです。意志のエネルギーがなければ精神生活は存在しません。意志どおりに動き、物事を実現していく運動を獲得し、人間は自分自身の主となっていきます。

人間は自然によって非常にバラエティに富んだ豊かな筋肉を授けられています。その中から自分が必要とするものを選び、いかなる方向に発達を作り出していくことも可能です。

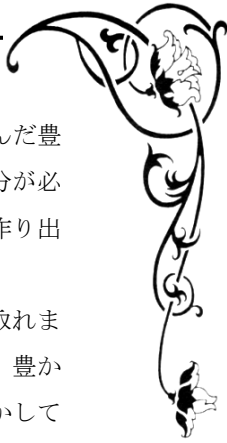
運動の中に個人の仕事が発達する様子が見て取れます。個人の仕事は、その人の精神の表現です。豊かな精神の発達の為に、さらに多くの筋肉を動かしてしかるべきです。ですから、こどもには将来に亘る自分の精神生活の実際面と実行面を豊かにするよう、「必要な運動の調整を発達させましょう」というのが私どもの理論です。

「運動の哲学」ともいうべきことを私達は頭に入れておかねばなりません。あらゆる生物は運動します。しかし、生物はでたらめに動くのではなく、目的と法則に従って動きます。もしも生物が各々に課せられた有益な目的に従うことなく、好き勝手に無秩序に動き回っているとしたら、世界は混沌状態に陥ってしまうでしょう。生物はどれも自分特有の運動と、前もって決められた目的を持っていて、あらゆる生物の活動が互いに調和がとれるように調整されているのです。社会の基礎は有益な目的に沿って導かれる運動であると言えます。

今日の原則とか考え方は、あまりにも「自己完成」や「自己実現」に傾き過ぎています。運動の真の目的を理解すれば、そうした自己中心主義はあるべきではないことがわかるでしょう。社会的な意味での個人は、個人と同時に社会の目的に到達する為に動いています。人間や動物の行動について、「行動」という時、それは一つの目的に向けられた運動を意味します。その行動は実際の生活の中心をなしています。

宇宙の計画の中では、あらゆる生物が自分のためではない一つの目的を持って、計算された運動に基づいて存在しているという事実を頭に描き、その視点から子どもの作業(運動)をみた時、より深く彼らを理解し、指導することが出来ましょう。

(要約文責: 園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第14章 知能と手

四足歩行をする他の動物と比して人間の場合、上肢(手肘)と下肢(足)は異なった機能と発達をします。赤ちゃんは同一の方法で自分の足を使うようになりますが、その手で将来何をできるようになるかは一人ひとり全く見当もつきません。手は足のように生物学的因子に影響されない分、精神に依存します。個人の精神ばかりでなく、様々な時代の人々が経てきた精神生活、知能発達、歴史的には文明の発達に結びついています。インド、エジプト、ギリシャ…その他未開の地においても、私達は今日、人間の手の痕跡を通してその時代の人間の精神と思想を認めることができます。手は人間に与えられた偉大な宝なのです。

子どもの運動の発達は二つの面を持ちます。一つは生物学的な面で、もう一つは精神的な面です。言い換えると、平衡と歩行の発達と手の発達です。いずれも筋肉の使用に関連していますが、両者は一歳半位で相互に関連する様子が見られます。即ち、目的の所へ自ら二足歩行で移動し、移動手段から解放された手を使って、意志ある作業を行うことができる存在となっていくということです。子どもの知能は手を使わなくてもある水準までは達しますが、手を使う活動によって更に高い水準に達し、明瞭な発達と性格のたくましさを示すようになります。このように、子どもの知能の発達は手の運動発達と密接な関係があります。

赤ちゃんは当初、自分の意志とは無関係に本能的反射的に手を動かします。初めは非意図的に偶然に物に触れますが、繰り返し体験するうちに意識が呼び起こされてきます。ひとたび意識の注目が起こると急速に発達し、5～6ヶ月位になると意図的把持(握る)ができるようになります。10ヶ月位になると単なる把持ではなく、ものを出したり入れたり、投げたり引っ張ったりという様々な形に発展し、本格的な自己訓練が始まります。この手の運動発達は視覚と深く結びついています。視覚によって目標を見定め、意志のある正確な運動へと導かれ、この繰り返しが更に知能を高め、精神活動へと結びついていきます。

この間、もう一面の平衡と歩行の発達にも著しいものがあります。首も背骨もぐにゃぐにゃだった赤ちゃんが、坐り、はいはいをし、立ち、歩くようになります。「僕、一人でどこへでも行けちゃうよ」とばかり、明らかにそれまでとは違う一つの自立の段階に達したのです。他人の助け無しに自分で何かができるということ—これが自立です。自立があれば子どもは急速に進歩し、無ければ進歩は非常に遅くなります。自立の重要性をしっかりと理解しておく、私達が子どもに対して何をすべきなのかが分ります。歩く力を獲得した子は自分の力で歩く事が良いのです。そうするうちに獲得された能力は強化され、練習によって定着するからです。いつまでも抱っこしたりバギーに乗せていては、発達は助けられるどころか阻害されてしまいます。相次ぐ発達の諸段階から私達が悟ることは、人間の自主独立は努力して到達されるものだという哲理です。

1歳半の時点で、発達上非常に重要な因子が観察されます。力の因子です。敏捷さと能力を獲得した子どもは、自分を強い人間だと思っています。何かをやりたいという衝動は、子どもの生命の奥底から湧き上がってくる止めようのないものです。自然が「お前は無限の可能性を持っている。だから強くなれ」といっているような感じです。子どもがひとつの行動を繰り返し繰り返し行う事はよく見られます。自分の全てを捧げ、その能力を獲得しようとしているのです。

やがて子どもは自分の周囲の人の行動をじっと見て、その真似をしようとする時期に入ります。子どもの内なる必要性がそうさせます。この模倣は、子どもが自由に行動できる環境にあって、よく観察されるものです。子どもは心の中で言うでしょう。「僕、準備できたよ。今度は自由になりたいんだ」と。

人間は自分で生き、自分を創らなければなりません。私共に言わせれば、「抱っこするから子どもは歩けないのです。やってあげてしまうから子どもは何もできないのです。子どもが本来持っている全能感を奪い、人生の出発点からすでに劣等感を与えてしまっているのは大人なのです。」

(要約文責： 園長 正岡里鶴子)

マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第15章 発達と模倣

1 歳半というのは、子どもが人格のつぼみを開こうとする最初のとても大切な時です。繰り返しますが、子どもが示す様々な生命の自然の傾向を妨げないように、大人は特に注意する必要があります。

この時期、子どもは模倣的傾向を示し始めます。しかしながら、模倣は簡単にはできません。模倣するためには、子どもの側に色々な準備が必要です。実はこの準備は子どもの努力次第で決まるのです。子ども自身がやろうとする気持ちを持ち、実際に自分でやることです。そして『自分は模倣することができるんだ』という力を自分の中に創り出すこと」です。重要なのは、模倣する努力を発達させることであって、与えられた模範例に到達することではありません。

では、どうしたら良いのでしょうか?子どもの観察からその答えが見つかります。この年齢の子どもは特定のことばかりを繰り返す傾向があるという事です。それを命じているのは、子どもに内在する生命の力です。子どもの中にこの生命のサイクルが動いている時、それをとめてサイクルを狂わしてはなりません。大人が無用な手出しをしたり、ちょっかいを出してはなりません。子どもは繰り返し繰り返し生きるための階段を登っているところなのです。とめたりやめさせる事は抑圧になります。抑圧を受けた子どもは、偏向性格や無目的行動性向を示します。数々の「扱い難い」子ども達の源をたどると、大人達がこうしたちょっかいを出したことに行き着くことがしばしばです。

できなくても意に介さず、繰り返すことに払う努力にこそ、子どもはやりがいと満足を感じているのです。邪魔されないで作業ができる場を、子どもの為に作ってあげるようにしなければなりません。子どもは色々な活動をするうちに運動の調整に熟達し、人の行動を真似する準備を整えます。一旦準備がととのえば、子どもは真似を自分のものにし、次にそこからきらめきを得て、独創的なことをやってのけます。しばしば大人は、先に子どもに独創性を望んでしまします。また、模倣も完璧さを望んでしまします。でも、子どもに関する限り、それは間違いです。

「歩行と探検」

2 歳児と歩行の必要性を再度みてみましょう。歩行は発達に欠かせません。子どもの中では一人前の人間になる準備が進行中なので、歩きたがるのは当然のことです。でも、子どもの歩行が、私達大人とだいぶ違うことに気付く必要があります。私達が歩くのと同じ速度で子どもを歩かせて、その結果子どもは長い道のりを歩くのは無理だと判断するのは間違いです。それは私達が馬と並んでなんとか一緒に歩こうとするようなものです。すぐに疲れてしまい、背中に乗って目的地まで運んでもらう事になります。そもそも子どもは目的地に着く事など望んでいません。ただ歩きたいのです。子どもの発達を助けたいと思うなら、私達は子どもを自由に歩かせ、その後についていくべきなのです。

子どもは足ばかりでなく、目で歩きます。周囲の面白そうなものが子どもを刺激して、歩を進めます。面白い発見に満ちた散歩です。子どものそんな様子は、地上に現れた初期の人間の行動に似ています。彼らは、薪や食べ物など魅力や興味を感じるものがあるまで、歩きました。発見に発見を重ねつつ、環境中を歩き回る本能が人間にはあるのです。それは自然そのものの一角をなし、教育の一部をなしています。教育的見地から、歩き回る子どもを一人の「探検家」として考えなければなりません。歩くこと事体が、完全な運動で、別にこれといった体育的な努力はいりません。人は歩く事で呼吸も消化も良くなります。いよいよ遠くまで歩いて視野を広げるうちに、子どもの人間としての内容も豊かになります。この考え方は是非教育に取り入れられるべきです。生活を二分して、スポーツで四肢を使い、読書で頭脳を使うと決めてしまうのはよくありません。子どもが発達計画と発達法則に従って自己を築いていかなければならない時期である出生時から、その後数年にかけては特にそうあるべきです。子どもに付き添ってある場所に早く着きたいと思っている大人とは、歩行を随分違ったふうに捉えているでしょう?

(要約文責: 園長 正岡里鶴子)

マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第 16 章 無意識的創造者から 意識的作業者へ

子どもの発達において、3 歳前後のところではっきりと一つの分割線があるようです。即ち、3 歳前は思い出せない出来事ばかりで無意識の中にありますが、それに比して 3 歳以降は記憶を伴う意識の発達の時期となります。無意識の時期は「精神的胎児期」とも呼ばれますが、出生前の肉体的胎児期にも似て、言語、腕の動き、足の動きなどの諸機能がそれこそばらばらに発達し、各機能が正に子どもの中で創造されていく時期なのです。

3 歳以降になるとそれらは統合されていき、意識のもとに初めて人格に統一性が生じてきます。この時期、子どもは大人に対して様々な抵抗を試みますが、子どもの目的は自己防衛ではなく、環境を征服してそれを自分の発達の手段とすることにあります。3 歳から 6 歳までに子どもは環境を意識的に征服して、本物の建設期に入ります。

3 歳以前に自分の中に蓄積し創りあげてきたものが、意識的体験のおかげで表面に出てきます。ですから子どものやることは、ただの遊びでもなければ、でたための行動でもなく、成長過程の作業なのです。手は知性に導かれて人間としての初めての作業を成し遂げます。子どもは自分の意志をはっきりと出していきます。自我が主導権を握って、手が活発に動きます。世界を無意識的な知性を通して吸収していた子どもが、今度は自らの手で意識的に世界を「捕える」ようになったといつてよいでしょう。

もう一つの発達形式は、前に獲得したものを完成させる事です。例えば言語です。3 歳の子でもでも、既に母国語の基本体系は身に付けていますがまだ不十分です。今度は言語が音声面でさらに正確に定着するのを促します。特に大変な数の単語が加わって言語を豊かにするのを促します。

こうなってくると、活動の動機を提供する確かな環境が必要です。今日留まるところを知らない物力主義が、おびただしい数のおもちゃを与えながら子どもをどんどん自然から引離していきます。

子どもが本当に必要としているのはおもちゃではなく、「現実の本物」であると思います。この形成期に精神がさらに発達しなければならないからです。

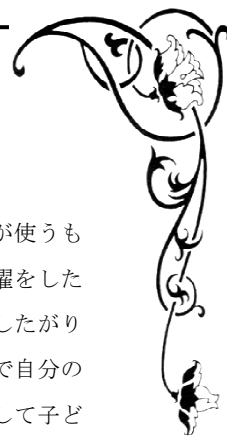
子どもは周囲の活動から感化を受け、大人が使うものに触れ、それを使いたがります。母親が洗濯をしたりパンケーキを作れば、子どもはその真似をしたがります。真似事にすぎませんが、それでも知的で自分の選択の意志に基いたものであり、その事を通して子どもは、環境の中で自分なりの役割を果たす準備をしているのです。子どもは自分自身の為に、そうしたことをする必要があることは疑う余地がありません。子どもは環境に適応し、生きていく力を獲得しようとしているのです。

今日では、子どもに自分の家庭や社会の大人の行動を真似る機会を与え、子どもの体力や能力に見合ったものを備えてやり、子どもが動き回ったり、話したり、建設的で知的な活動をする気になるような環境を与えてやるようにするといった傾向が段々に現れてきています。しかし、私がこの考えを初めて披露した時には人々はびっくりしたものでした。子どもの教育の原型とはどんなものかを印象づけたのです。子ども同士の社会生活が驚くべき結果を見せてくれました。人形よりも仲間を好み、おもちゃよりも実際に使われる器具を選んだのは、他ならぬ子ども達自身だったのです。

大人にはそうした子どもの「本当の姿」が見えていません。私達はその事に気づき、実際に行った結果は期待以上のものでした。子どもは「まるで違った性格」を示したのです。初めに表れたのは、「自立」の態度でした。「自分でやりたい。手伝わなくて」と言いました。自分にふさわしい場所に置かれると子どもはその主人となり、ついで社会生活と性格の発達が自然に起こりました。

単純な子どもの幸せが私達の到達目標ではありません。将来子どもが、責任を持って自分のことは自分でする人間の建設者となり、自分を必要とする人の力となってあげられる人になるように意図しましょう。これが、意識に目覚めて新しい人生に踏み出した子どもが示してくれる光明です。

(要約文責： 園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より
第 17 章 知識を吸収し想像力を働かせる
ことにより更に向上するということ (1)

自発的行動

この年齢の子どもは身の回りの物を触り、手を使って経験せずにはいられません。これは人間発達の自然の法則ともいえるべきです。私達は子どもが実際の生活環境の中で、自分に適した物を道具として使い、それが精神活動に深く結びついていることに気付きました。何とかそれを援助し解釈しようとして私達の教育法が生まれてきたのです。

子どもは、3～6 歳になると知識の受容力が非常に大きくなります。0～2 歳の間に無意識的に吸収していた物事を意識的に体験し、はっきりと認識することで知識として受け入れていきます。

このことは様々な技術についても言えます。例えば、「文字を書きたくてたまらない」という爆発的衝動を示す子どもによく出会います。よく観察すると、この自発的行為は言語に対する敏感期というだけでなく、既に子どもは日常生活や感覚を十分に使う事などによって、「書くための手」の準備を先行して行っていた事が分ります。これはとても重要なことで、自然もその原則で動いています。この事から私達の教育法の必須項目として「間接的準備」の原則が取り入れられています。

さらに言語について述べるならば、子どもは発達過程において、まさに文法的ともいえるやり方に従って、無意識的に音、音節、名詞、形容詞、副詞、接続詞、動詞等の順序に言葉を使っていきます。そこで意識の段階に入った子どもに、それに従って文法による正しい母国語を教えます。「子どもに文法?」と意外に思われるかもしれませんが、実はこの時期が文法に触れる好機なのです。

更に観察により、この時期の子どもは言葉に対する特別な感受性があり、莫大な数の言葉を容易に自分のものにできることがわかりました。子どもを取り巻く言葉環境が豊かで良質であることが子どもの助けとなります。衣類、家にあるもの、昆虫や草花、文化に関するものなどありとあらゆる言葉が対象になります。幾何図形や、おしべやめしべ等の植物学的な名称も、概念とともに難なく覚えてしまいます。

技術的専門的にというのではなく、その場に関連あるものや、身の探索に関連付けて、子どもの経験に基いて広げていってあげるのです。植物の「根」を教えたところ、庭の植物をことごとく引っっこ抜いて確かめたとして親から苦情がきたという笑い話もありました。

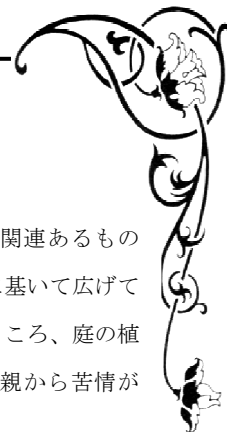
やがて子どもの心は具体的なものの世界を超えていきます。目に見えないものを想像するのは、高等な精神作用です。「世界」という言葉は子どもには目に見えず捉えどころのないものですが、実験的にまず 6 歳児に「二色の地球儀」を紹介するところから始めてみました。茶色の陸と青い海からできています。陸は土があって自分たちが住んでいるところです。これは容易に理解でき、いろいろと想像し始めます。次に大陸ごとに色分けされた「色つき地球儀」を紹介すると、アメリカやオランダなど子ども達が聞きかじって知っている国へと発展しました。結果としては、子ども達はみんな興味深々で新しい言葉を吸収し、豊かな想像力を働かせ、見えない世界は身近になっていきました。

一般的に世間では、おもちゃで遊ばせ、童話で想像力を養わせるのがこの時期の必須事項だと考えられています。しかし、子どもに実際にあるものとして、既に知っているものを与え、それを媒体にして想像力を働かせるようにすれば、子どもは現実の外界を身近に感じ、より良く理解する事ができるでしょう。

この年齢の子どもは何でも説明してくれとせがむものです。面倒くさいと思わず、知識欲の現れだと思えば、子どもの質問はなかなか面白いものです。とかく私達は長々と説明してしまいがちですが、まだ子どもは、長い説明にはついていきません。

遊び、想像力、質問、この三つがこの年齢の子に特徴的なものです。3～6 歳の子どもの心についていくには、大変なコツと繊細さが必要ですが、大人の側はなかなかそれができません。幸いにして、子どもは大人よりも環境から多くを吸収しますが、それにしても私達は、できるだけ児童心理を知らなければなりません。

(要約文責： 園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第17章 知識を吸収し想像力を働かせる ことにより更に向上するということ(2)

精神面の発達

興味を引く面白い対象物に出会い、それをするのに正確さを必要とする時、子どもは神経を集中させます。また、何度も同じことを繰り返します。こうしながら、子どもは人間形成、発達に必要な能力を身に付けていきます。行動を通して、適応本能が目覚め、大掛かりな自己形成が始まるのです。3～6歳は認識と完成の期間です。子どもの人格形成はこの期に決定され、それがそのまま各自の人間性の中に深く根を下ろしてしまうのです。子どもの人格形成期に一旦身に付いてしまったものは、その後どうしようと、拭い去ることは不可能です。ですから、この期の教育の社会的にみた重要性がお分かりになるでしょう。生まれてから最初の3年間で、子どもの精神形成の上で障害となるようなことがあっても、この時期ならば、諸々の欠点を直すことができます。同時に思慮深く教育に当たれば、人間の社会及び民族間の差異を本当の意味で縮小できると考えます。

感覚訓練と数学的頭脳

子どもの人格形成と感覚教育の関係について、どう考える必要があるのでしょうか？ 感覚は環境との接触点です。感覚を通して環境を調べつつ、子どもは自分の体の諸器官のより良い使い方を習得してゆきます。感覚とは外界を探索探検者のようなもので、知識への道を開くものです。私達は子ども達のために、より感覚が洗練されるような教材を準備します。色、音声、雑音、形や寸法、重量、触覚、嗅覚、味覚などです。それらを通して、色々なものの相互間の細かい相違が感じ取れるようになり、差異がわかってくれば子どもを取り巻く外界はより豊かになってくるわけです。まぎれもなくこれは、子どもの人格形成へと導く文化の一形式なのです。

それぞれ異なる特性を持ったものとその概念を体験し分るという事は、これから自分が探索していくためのアルファベットを得たようなもので、知識の扉の鍵を与えられた事になります。アルファベットの数は少しですが、組み合わせでできる単語の数は

無数なのです。感覚の訓練を受けた子と受けていない子では全く違います。受けた子は、ちょっとした相違にも敏感に反応しますから、何にでも興味を持ちます。全ては物を知ろうとして眺め、興味を感じるか否かに掛かっています。

子どもはものの特性を区別するようになります。これは抽象化への第一歩です。抽象化されたものは、精確さを増すほど価値を持ってきます。人間の精神の大きな能力の柱は、抽象化と想像力です。抽象化されて生ずるものの数は限られていますが、想像するものは際限がありません。この二つの能力が精神形成に当たって互いに強みを発揮します。教育に当たっては、この二つの働きが共に存在し、統合されるよう留意します。

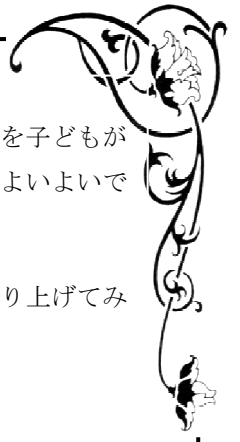
正確さによって形成される精神の部分を「数学的頭脳」と呼びましょう。「秩序」の中にあります。感覚教具は、数学的な頭脳を発達させる一助となることは間違いありません。

胎児期に決定されている青写真

子どもは胎児期に既に将来の青写真を用意して生まれてきます。人間の精神はそれ自体創造的な基礎部分の上に形成されますが、ただしそれは誕生後の話です。言語や慣習、道德、宗教など、環境から吸収して獲得していきませんが、基本になる青写真の骨組みによって肉付けしていくのです。

青写真は自然法則によって定まっているものですが、それにもかかわらず色々なことが徐々に発展し続けていきます。それは、生まれてくる一人ひとりが精神面での想像力を持ち合わせているからです。この想像力が自分の置かれている環境に適応できるものを創り出すからです。これが子どもの生物学的機能です。この機能があるからこそ社会の発展が可能なのです。この機能は私達が制御できる創造作業であるからこそ、私達にとってこの上なく大切なのです。

(要約文責： 園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より
第18章 子どもの性格とその欠点

性格の自然形成

もう一つ明らかにしておくべき重要事項があります。幼児の性格形成に関するものです。

「性格」は、子ども一人ひとりの創造的生命が、外界で出会う様々な事柄にどのように対応していくか、努力していくかで発達していきます。個人個人の差は、日常生活におおいに影響されます。個人が諸条件に適応しようと努力することによって無数の差異が生じてくるわけです。

前に述べたように、発達の第1段階(0～6歳)は、創造の時期で、性格の根もまたこの期に発します。小さな子どもには、正邪の観念がありません。まだ私達の道徳観念外に住んでいるのです。実際子どもをつかまえて、「おまえはならず者だ、悪人だ」とは言わないでしょう？ 善悪の観念が特徴的となるのは、第2段階(7～12歳)です。道徳観念が形成され、これは後に社会観へとつながっていきます。各期はそれぞれ根本的に異なっていますが、一方で実は次の期の基礎を築いています。「未来を築くには現在に注意を怠るな」ということです。つまり、ある期の必要性がよく満たされる時、それに続く期の成功は大きいといえます。

子どもは初めの2～3年で将来を左右するような影響を受けます。この期に負傷したり、暴力を受けたり、大きな障害に遭うと、人格の発達の阻害要因となります。受胎期、妊娠期、出生時、出生後と子どもが正しく扱われるなら、理想的な原型が出来上がるわけですが、現実にはなかなかそうはいきません。3歳位で性格の違いははっきりとしてきます。生後0～3歳の間に身に付いた性格の弱点は、次の3～6歳の間に矯正しようと事実上結論されましょう。この時期は、天性により、完成に向かって特別活発な活動をしている時期だからです。

極端な弱点は精神生活と知性に跳ね返ってきます。第1期で自分の力を伸ばすことができない環境に置かれた場合、第2期で学習困難に陥ったり、道徳観を発達させ得なかったりして、さらなる問題を呼び込んで不適応状態を作り出します。

何か性格的に問題を感じる時は、その理由を子どもが以前に送った生活の中探そうにしてみるとよいでしょう。

ここでは、一般的に目に付く両極端の例を取り上げてみましょう。

＜強い子ども＞

動きが激しく、怒りっぽく、反抗的侵略的行動、独占所有欲、利己的、嫉妬深い、注意の集中ができない、物を落として壊す、怒鳴る、跳ね回る、人の邪魔をするなど。

＜弱い子ども＞

無感動、無気力、激しい泣き、人にやってもらいたがる、機嫌を取ってもらいたがる、すぐに退屈する、嘘つき(消極的自己防衛)、盗み(他人のものを所有するための代償行為)、悪夢、拒食過食など。

こうした子ども達は、扱いにくいと言われます。強い子どもは特に、「良い子」とは思われていません。親は、怒鳴りつけたり、たたいたり、脅したりして手厳しくやっつけようとします。或いは、説得戦術で理屈を言い聞かせたり、泣き落としにかかったりして、子どもの感情や心に訴えようとします。そして、ついにはサジを投げってしまうのです。弱い子どもは、得てして問題をおこしませんから、「この子は従順で良い子」「私が好きだから、離れられないのだから」「優しく、繊細な感受性を持っているのよ」と解釈します。やがて見落とされるか、病院行きとなります。

もし私達が、いかにして一人の子どもの人格形成活動の周期が進行するのかわかるならば、こうした子どもたちの問題は、解決の道に踏み出す事ができるでしょう。発達の中で、子どもの自発的行動が禁止されたり、大人が何でもやってしまったりすることが度重なると、こうした性格的な弱点が顕著になってきます。子どもが何か頭を使うことを始めたら、もう不必要な手助けをしたり、妨げたりしてはいけません。人間は自分なりの社会適応の行動法を、自分で築き上げなければなりません。これは道徳教育の問題ではなく、人間形成の問題です。おどしたり、おだてたりする必要はなく、ただ生活環境を正しい形にすることのみが必要なのです。

(要約文責： 園長 正岡里鶴子)

＜モンテッソーリ教育講座 2013-14＞

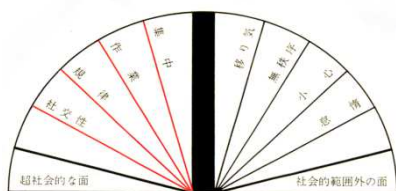
マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第19章 子どもの社会的貢献

——正常化

私共の学校で、子どもの観察を通してわかったことは、子ども達が本当に願っていたのは、常に何か作業をする事でした。自分で作業を選び、子ども自身が内面からの指示に従って穏やかに楽しく行った後に、自発的に子ども達の中に「規律」が生まれてきました。このことは世間を驚かせました。興味のある作業に没頭する子どもには、良い子や悪い子や優れた子などという分類は存在しません。そこにあるのは、誰も同じ「ただ一人の子ども」です。

人間は様々な能力が統一された総体ですが、その統一性は、実世界での積極的体験によって形成され、自然法則によって導かれます。統合が何らかの外的要因で妨げられると、ゆがんだ発達を遂げる結果となります。その結果、様々な逸脱した状況が起こってきます。下の図には子どもの色々な性格が記されています。真ん中の太い垂線は作業への集中を表します。右側の望ましくない性格はこの真ん中の線を通して、左側の望ましい性格へと転じます。大人の力で子どもの短所を全て消えて無くならせるわけにもいかず、言い聞かせて直るものでもありません。いつでも必ず、子どもは実際に物を手で扱ってする作業、精神を集中させて行う作業を積み重ねることによって変わるのです。これが、私達が「正常化」と呼んでいるものです。



第10図
子供の正常及び偏向性格の特徴概要

子どもの正常な発達において、「作業と自由」は必須事項ですが、私達の考える「自由」についてふれておきましょう。自由とは、押し付けることを止め、権威に服従させることを止めることと思われがちですが、これは表層的な理解です。「大人の威圧」を排除すると、それまで受身でしか制御されてこなかった

「子どもの衝動」は、コントロールを失って、無秩序や怠惰にならざるを得ません。誰もが好き勝ってにしていればいいというものではありません。これは自由の観念を裏切るものです。本当の自由とは、そういうものではなく、秩序を愛し、環境に適応するための自己コントロールを伴う極めて能動的なものであり、発達の結果として出てくるものです。隠れている内なる力が教育によって発達したものであり、発達とは努力と自分の経験によって出来上がる人格形成と言えます。大人になるために、そして真の自由を得るために、どの子ども通らなければならない長い道なのです。

子どもはひとつの作業に集中することによって正常化します。その為には「集中をおこさせる動機」が必要です。それはまた、子どもの「精神的秩序」につながるものです。科学的基準にそって導かれた精神的秩序と動作の調整は注意の集中をもたらし、ひとたび集中がおこるとそれは子どもの活動を自由にし、欠陥を直すのです。子どもがただいい加減に、一つのことからまた別のことをやるだけでは欠陥はなくなりません。肝心なのは、その作業が子どもに非常な興味を呼び起こし、子どもが自分の全神経と能力をそれにぶつけることができるかということです。

私達は子どもの「治る時」を目指す到達点にしているわけではありません。それどころか「治る時」は出発点なのです。治した後で、初めて人格は強固になり、発達もするのです。環境によって、「正常化」した子どものみが、それ以後の発達において、素晴らしい力を発揮します。自発的規律、持続力のある楽しい作業、人を助け、人の立場に立って考えるという社会観などです。活動を自由に選ぶことは、子どもの普通の生活様式となるものです。そして無秩序を直すのが、新しい生活への第一歩となります。

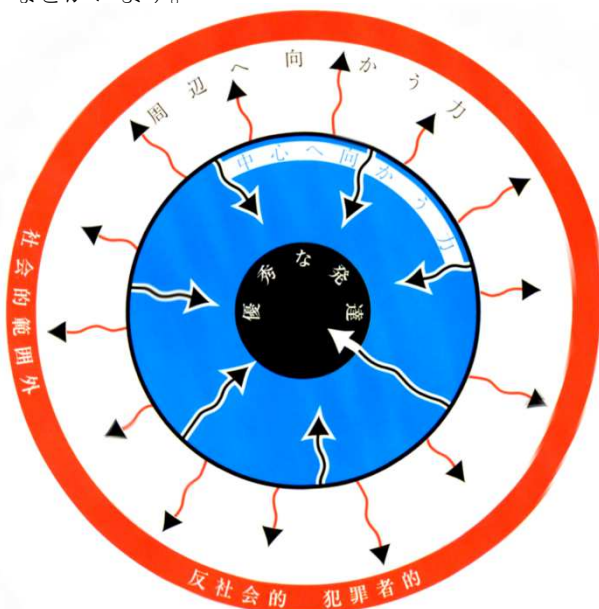
私共の学校では、子どもは望ましい性格が強化されるばかりでなく、知的なものを求めてやまなようになります。子どもは自己完成の道、および精神的に高度な段階に到達する道を見出し、自分で鍛錬を行っていきます。

(要約文責： 園長 正岡里鶴子)

マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より
第20章 人格形成は一種の征服である

子どもは3から6歳の時期に、環境と関わりながら、実際の活動と経験を通して、自分で自分の性格を形成し、正常化に向かう事を見えました。

下の図には、4層の円があります。中心円は完成された理想の状態を表しています。それを取り囲むのが「正常化されたタイプ」の人達の第1グループです。中心に向かおうとする力が働いています。その外側は、第2グループで「正常化されていないタイプ」の人達です。外側に向かおうとする力が働いています。さらに一番外側には、社会生活に適応できない精神異常者、非行者、犯罪者などがいます。



第11図

社会的に優秀な型と劣等な型へ向かう力を表わす円

社会への適応は、生まれてから6年間の間に行われます。これはとても大切なことです。社会生活の中では、第1グループの円の中心に向かうとする力と、第2グループの外に飛び出そうとする力が常にせめぎあっていますが、人間全体でもう一つ明らかな事があります。それは、「人間は自分を引き上げようとする傾向性を持っている」ということです。個人も社会も絶えず進歩に向かおうとする傾向を共通して持っています。言い換えれば、人間の行動は進歩しうるものであって、前進したい衝動を感じるのは人間として当然なのです。

誰かが何かを発見し、それによって社会は刷新されてきました。精神分野でも同じことが起こります。

私達の知る全ての精神的なもの、物質的なものも、誰かしらのなした成果です。それは個人に留まらず、他人や社会に影響を与え、人類を進歩させてきたのです。

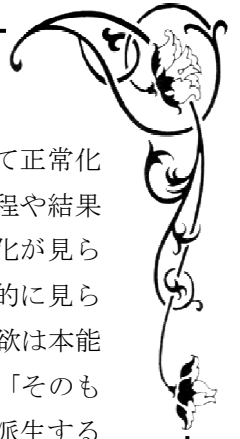
再び子どもに目を向けてみましょう。指導者が三番目の円に属し、二番目の円にある子どもを指導したとしたら、どうなるでしょう？おそらく子どものレベルを下げってしまうでしょう。基本的なところで今日の教育が、子ども達に劣等感を生じさせ、わざわざ人間の能力を低下させているように思います。人間の高いレベルの力でなしに、低いレベルになっているのではありませんか？性格形成期に正しく援助されなかった事にその原因が求められると考えます。私達は真実の人間の水準を取り戻すべく努力をしなければなりません。子どもには自分達の想像力をもっと活用させるべきです。そうすれば、第1のグループは当然完成の方向に向かうでしょう。防御の状態で構えるのではなく、征服せんとする燃えた状態なのです。第2のグループ全体にも大きな影響を与えるでしょう。

人間の生涯には、ただ一度だけ深い精神形成の時期があることを繰り返し述べてきました。その時期が、誤った環境条件のために極めて不満足な状態であったとするならば、人類の大多数が野蛮な状態であったとしても驚くに当たりません。

しかし、自然の道に沿って人格形成を可能にし、しかも道徳のお説教でなく、創造的に行動する機会を与えようとするならば、今までとは違った種類の教育が必要になります。子どもに適切な「手段」が与えられれば、その結果は非常に異なったものとなるはずですが、それには子どもが、それ相応の反応を示すものを用意しなければなりません。この時期に自己を確立するチャンスを逸すれば、それ以降には同じ機会は二度と現れないのです。

私たちは、適切なる時期に人間の自主建設の手助けをしたいのです。人格の形成は一種の征服なのです。そうすれば、人類は偉大なる何者かに向かって前進できるのです。私の提唱している教育法は、暴力を用いない革命です。これが勝利をおさめれば、暴力革命とは永久に縁を切ったことになりましょう。

(要約文責： 園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第21章 所有本能の昇華

これまで明らかにしてきた子どもについての事実を、この後は一つずつ、私達なりに解釈していくことにしましょう。

蚕(かいこ)の幼虫を思い起こしてみてください。葉の間を這い回っていたのが、ある時、茎の分かれ目にやってきて動きを止め、繭を作り始めると大きな変化が起こります。子どもの場合の大きな変化の始まりは、何かある一つの事に集中するという現象です。どの子どもにも見られる現象なので、これは何か人間にもともと備わっている基本的なものに違いないと思いました。

「集中する」以前は、子どもの気持ちはあっちこっちに移ります。周囲の色々な物からの刺激に、子どもは支配されているのです。ところが子どもが、ひとたび何かに強く惹かれ、注意の集中を始めるということは、そこに自分自身の世界を創り出し、自らが主人公となってその世界を統御し始めたということなのです。自然は子どもに創造的作業をするための、ものすごいまでに徹底した好奇心や興味を与えているのです。

集中に次いでは、忍耐力が要求されます。これも大切な力です。一旦集中すると繰り返し作業を行うわけで、これが一種の強化作用を生じます。始めた事はやり通す能力です。

大人は思考によって行動を決定しますが、子どもは自然法則に従って決定するものです。抗い難い内なる力が、子どもの選択に大きく作用するのです。それを誰かが妨げるなら、子どもは意志力も集中力も共に発達をさせるチャンスを奪われてしまいます。ですから子どもの最も強い本能は、大人の干渉から逃れようとする事なのです。

人間の精神面の各部分が形成されるのを観察していると、そこに出てくる様々な現象は、教育によってのみ生じたものではなく、宇宙そのものを導いている偉大で複雑な過程から生じている事を感じます。それは、大自然の意志であって、私達がどうこうできるレベルではないことが分ります。

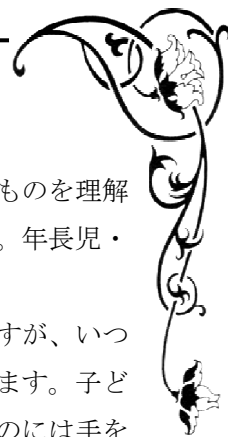
子どもは、集中して作業することによって正常化されることを前に述べましたが、その過程や結果において、それまでであった性格特性に変化が見られるものがいくつもあります。ごく一般的に見られるのが、「所有欲」に関してです。所有欲は本能的な部分ですが、正常化された子どもは、「そのものの自体が欲しい」というより、それから派生する知識に注意を向けるようになります。所有欲が変形を受けてくるということです。そのものを「単に所有することを欲する」のではなく、そのものを「理解することを欲してくる」のです。

興味は知的になり、所有欲は知識欲という形を取ってきます。物事は一体どういう仕組みになっているのかを知りたいという欲です。知的所有欲は、子どもを環境に非常に強く引きつけ、環境を注意深く取り扱い、全てのものをこの上なく細やかな愛をもって扱うように仕向けます。もはや所有欲と言うより、高度の興味という形をとって、「知り、愛し、仕えること」を願うようになるのです。こうして興味や好奇心は研究の推進力になっていきます。庭で草花をやたら取って引きちぎっていた子は、「私の!」ということをやめ、植物というものについて語り始めます。このような所有欲の昇華、愛は子どもの心に生まれた新しい意識によるものです。

説教をしても子どもの破壊性は直せません。説教は一時的にその行為を止めるでしょうが、数分後にはまた同じ事を始めるでしょう。作業と集中のみが、知識と愛をもたらし、以前には隠れていた人間の精神性をあらわな形にすることができるのです。

「知り、愛し、仕えること」は、あらゆる宗教の三大根本理念になっていますが、子どもこそが、真に私達の精神性を目覚めさせてくれます。肝心なのは、物理でも植物学でも手先の仕事でもなく、作業によっておのずからできあがってくる意志力と人間精神の構成要素なのだと思います。繰り返して言いますが、子どもは「人類の精神的建設者」です。子ども本来の自由な発達を阻むものは、人間精神を閉じ込めている壁に塗り込まれた粗悪で頑固な石のようなものだと思います。

(要約文責: 園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第22章 社会的発達

環境

子どもがまず第一歩としてなすべきことは、集中への道と手段を見つけることです。集中は子どもの性格の基礎を作り、社会的行動を準備しますが、その為には環境が重要です。重要な性格の形成期にある子どもにとっては、特別に配慮された環境が大きな効果を持ちます。私達は世界中で子どもを長い間観察し、実験的研究を重ね、整えられた環境を作り上げてきました。

私達の環境では、同じ教材は一つしか置いておりませんので、お友達がやっていたら空くまで待ちます。待つ事で大切な社会性が生まれます。毎日の経験を通して、自分の思いと同様に他の子の作業は尊重しなければならないということが分かってきます。社会適応の始まりです。社会は一個人の好きなように動いているのではなく、調和されなければならない種々の活動の複合体でできているのです。

こうした環境の中で自由に自主的に活動することで、子どもの中に有る望ましい資質が姿を現わします。大人の干渉なしに子どもは自分の正しい道を見つけます。私達のスクールでは、子ども達は四六時中生きた共同社会の中で生活をし、全てを社会経験として学んでいます。

社会生活

子どものこの社会の構成について考えてみましょう。社会生活の魅力は、出会う人間に色々なタイプがあることです。年齢の異なる子どもを混ぜることが肝心です。異年齢混合では、大人では伝えられない沢山の子ども同士の学びが見られますし、助け合う姿も良く見られます。同年齢グループでは、レベルを上げる唯一の方法は、競争意識を燃やさせることでしたが、屈辱やねたみや憎しみを生じることが余りにも多くはありませんでしたか？異年齢グループでは「素適だな。あんなふうになりたいな」という憧れから始まります。年長は自ら先を学ぶことも、年少に教えることも自由です。

教えることにより、前よりはるかに明確にものを理解することができるようになっていきます。年長児・年少児両方の側に愛と賞賛があります。

各人には一応定められたお部屋がありますが、いつでも「知的散歩」ができるようになっています。子どもは、自分のレベルに合わず理解困難なものには手を出しません。反面、自分が興味を持ったものは参加せずともずっと眺めています。何かを学び取っているのでしょうか。子どもの進歩は、こうして周囲を自由に眺めさせてあげることに関係してきます。こうしてみんながお互いの精神的エネルギーを、直接的間接的に交換し合うことで、健全な正常性を身につけていきます。

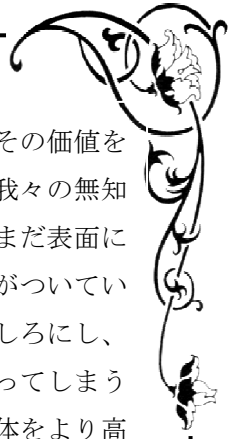
観察していると、子どもは私たち大人と同じような感じで助け合っていないことに気付きました。大人はよく不必要な手助けをしますが、子どもは必要な時だけしか手伝わらないのです。子ども時代に絶対に必要なのは、むやみに助けてはならないことですが、子どもはそれを直感的に知っているのでしょうか？見ていて、「なかなか教えられるなあ」と思います。

また子どもの面白いのは、お部屋の秩序を乱す子への対処の仕方です。「それは本当はやっちゃいけないことだけど、気にしないでいいよ。僕だって来たばかりの時は同じようなことやってたんだから、そのうちできるようになるよ」といったところです。子どもは正常化すると自分より弱い者や劣った者を助ける気持ちが現れてきます。

もう一つ、あまり知られていませんが「最高のものをほめたたえる気持ち」というのがあります。ねたみ心なく、「すごいね！」と言い、一人の成功がクラス全員を動かし、全員の成功を招く結果につながることもしばしばです。

こうして日々の生活を共にしていくうちに、子ども同士の間にはっきりとした共同意識が生まれます。最も気高い意識に根差すものであり、これがグループの統一性を産むわけです。

(要約文責： 園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第23章 連帯意識による社会観

整えられた環境で自由な経験を重ねるうちに、子どもは集団としての意識を感じ出し、ひとつの「社会」を形成してきます。通常、社会意識の第一段階といえば「家族意識や同属意識」がありますが、子ども間にも同種のものが芽生えます。これは教えたものではなく、本能的に現れるものです。それを私は「連帯意識による社会観」と呼んでいます。子どもは適切な環境との接触により、それを発展させます。

組織化された社会

6歳を過ぎると子どもは社会性において、別の発達段階に入ります。はっきりした意識によって、社会のルールを知ろうとし、従おうとし、秀でたリーダーを捜し求めるようになります。人間社会は、個人の目的をもって、自分の作業をするだけで成り立っているわけではありません。人間社会の最終形成は組織化によるものです。とは言え、実際は二つのものが絡み合っています。社会は組織化だけで成り立つわけではなく、個人間の連帯意識によるところも大で、後者が基本となって前者の元を作っています。立派な法律も優れた政府も、人間という大集団を把握し治めきることはできません。個人がそれぞれ団結しようという気持ちを持ち、一つの集団とならなければうまくいきません。つまり、一つは心の意識下の創造的領域に根ざすものと、もう一つは意識的活動の世界からでてくるもの、これら二つが必要です。言い換えれば、一つは幼児期に始まり、もう一つは大人の手によって、それと重なり合わされるものです。そして、安定してしかも基本的なものは、連帯意識の部分であるということです。

しかし、一般的に大人の社会は、連帯意識の部分ではなく、社会の組織的意識的部分でのみ判断し、行動し、生活を規制しています。組織に不可欠な基礎についてはまるで考えずに、人間を統御することばかりに気を配ります。そこで問題にしたいのは、大衆を教育し、個人の性格を再建し、

各人のうちに秘められた宝を大切にし、その価値を大きいものにしていこうということです。我々の無知は大変な危機を含んでいます。子どもがまだ表面に現していない創造的な精神の芽生えに気がついていません。知らない間に人間創造をないがしろにし、自然がどの子にも授けた宝物を踏みにじってしまうことが決定的意味を持つのです。世界全体をより高い水準に引き上げることのできる道徳的知的価値あるものの根源はここにあるのです。

悪をやっつける為に悪を捜し求めるのが、大人の典型的態度です。「～をしてはいけない」「～はだめ」と否定命令ばかりが子どもに投げられます。教育の基礎がこの原則の上に立っているのは、社会生活全体の質を下げることになります。

大人は子どもは無能だから教え込まねばならないと思っています。子どもにはできまいと大人が思うことを、子どもはよくやってのけるではありませんか。そして、子どもは自分よりできた子を認め、ほめてやります。このような精神的才能は現に存在していて、しかもそれが本能的なものであるならば、私たち大人は、それを激励し、育ててやることです。子どもはよくけんかをした子と仲直りしますが、大人が先取して介入し、仲直りを強制しても本当のところ上手くはいきません。子どもは自ら解決の力を持っています。天性による感情は大切に育てられるべきです。

教育期間中ずっと対抗意識や競争意識や野心が奨励されたのでは、誰が一体、二十歳や三十歳になって、良き人間を説かれて、良き人間になれましょうか？ 大切なのは説教ではなく、創造的本能なのです。お互いに役に立っているのだという意識、精神的連帯意識から派生するまとまりから、善は出て来るものなのです。連帯意識によって作られた社会が全ての社会組織の基礎になっています。ですから、子どもの教育は、性格と社会性の形成初期にある3～6歳が肝心です。こどもが3～6歳で身に付けたものが、人間の行動の大元であって、自由と秩序のある適切な環境に置かれて初めて、発展進化できるものなのです。

(要約文責：園長 正岡里鶴子)

マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第24章 誤りとその扱い方

私達の学校では、自由を重んじていますが、子ども達にとって「～をする」とか、「～をしてはいけない」などのルールは必要です。先生達は子ども達に教え、お手本を示しますが、いつまでも褒めたり怒ったりと、干渉をし続けてはいけません。なぜなら、いつまでも「アメとムチのやり方」で育てられると、子どもは自分自身で考え、判断し、自分自身を導くという能力を欠いてしまうからです。褒められることが目的となり、怒られると反抗したりやる気を無くしたりしてしまいます。正しいことをするという本来の目的がどこかにいってしまうのです。

子ども達はみんな、今学び成長しているところです。練習と経験だけが、子どもの発達を推し進めます。規律を受け入れることが弱い子どもは、既に規律の課題をクリアしている子どもとともに作業させることによって、規律を身に付けていきます。子どもは、身近にいるちょっと上の子どもを手本としながら、自発的に長い間練習をして後、初めて向上し望ましい行動がとれるようになっていくのです。

最初からできる子どもはいません。また言われて直ぐに、「わかった」と言うことができるようになる訳でもありません。そして、誰でも間違えるのが当たり前のことです。大人も子どもも、こうした「事実」を受入れ、日頃から誤りに対して親しみを持つように努めるといいと思います。人生を送っていくうちに、自然に直る誤りが沢山あります。しかし、中には間違いに間違いを重ね、直さない場合もあります。それは、本人が誤りに本気で気付いていないからです。私達は、より良いものを求めるならば、まず自分の欠点に注意を払うべきです。向上するには、自分で自分の誤りを正す以外に道はないからです。子どものうちから、堂々と誤りの存在を認め、正面から向っていきましょう。これを「誤りの管理」といいます。

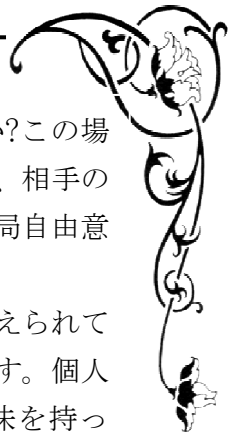
大人は、誤りを正すよりも、子どもが自分の誤りに興味を持つようにさせましょう。

誤りは決して咎めるものではなく、間違えたことに気付くような何らかの方法が与えられなければなりません。教師には、二つの事が要求されます。一つは、日常的に色々な面で、子どもの感覚を鋭くしておく事。二つ目は、子どもに誤りを起こした時に、どう扱うかを教える事です。子ども達が自分達の力で気付き、乗り越えることができるように背後から援助をします。子どもに「自分ができる」という気持ちと、「やってみよう」という気持ちをおこさせることが肝心です。モンテッソーリの活動では、やり終えた後に必ず振り返り、「誤りの自己訂正」ができるようになっていくのはその為です。やがて子どもは「僕は完全ではなく万能でもないけれど、僕にはこれだけのことができるし、その自信があるんだ。間違えても自分で直せるんだよ」と誇らしげに言う事になりましょう。繰り返しますが、私達は、教材を与えるばかりではなく、誤りをわからせるための指針を与えることが重要なのです。子どもが自分で良くなろうということに興味を持ち、自分で常に正誤を判断し調べてみることは非常に重要で、そうしなければ子どもの進歩は間違いありません。子どもは天性として正確さに向うものであり、正確さを得るための方法そのものが子どもの心に訴える何かを、もともと持っているのです。

誤りは人間を分離させますが、誤りの訂正は人間を結びつけることになります。誤りそのものが興味の対象となり、それが絆となって、間違いなく人間同士を仲間意識で結び付けます。誤りを見つけたら、咎めることなくその場で直すようにし、正しくなったことをみんなが喜ぶようになってきます。誤りは特定の個人には関係ないものになって、誤りを自由自在にあやつれるようになるのです。子どもにはその力があります。子どもはもっと、自分は何ができるのかを自分で知らなければなりません。

こうして、ちょっとした事が、大きな大切なものへと導いてくれるのです。

(要約文責： 園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第25章 従順さの三つの段階

子どもの性格の話をする、たいてい意志と従順さの問題になります。つまり、自分を押し通そうとする子と、素直に従う子の話題です。教育の現場では、教師への従順さを要求し、先生の意志を子どもの意志に置き換えようとしがちです。

大人は子どもの無秩序な行動を見て、それが子どもの意志から出ていると思いがちですが、それは事実からほど遠いと思います。子どもの心の苦痛や乱れの表現が、無秩序や暴力のように見えるのです。適切な状況のもとでは、意志は生命にとって有益な活動をさせる力です。幼児の初期の動きは本能的でしたが、やがて意識的になり、次に自由意志によって外れずに行動するようになっていきます。

大切な事は、意識的に意志力を働かせる能力を育てていく事です。大人は自分の意志を押し付けることで、子どもの意志力を壊してしまいがちです。一般的には、話して聞かせて納得させたり、自分をお手本として見せて解らせれば良いとするものですが、実のところ、これでは意志力は育ちません。なぜなら、意志力は子どもが自分の力を行使してのみ発達するものだからです。にもかかわらず、普通の学校では、子どもが自分の意志を働かせる機会を否定したり、妨害したり、禁じたりすることがしばしば見られます。子どもがそれに抗議すると、反抗として扱われます。教育者は全力を尽くして子どもの意志を破壊しているかに見えます。

教師たちは昔はムチを使い、「規律」は脅迫と恐れによって保たれました。言うことをきく子は良い子、きかぬ子は悪い子という結論に落ち着くわけです。良い子にさせる為には、まず子どもの意志を打ち砕かねばならないと考えるのが、そもそもの誤りです。意志力を十分に発達させ、自由意志で人の命令に従う

方を選んだとしたら、どうでしょうか?この場合の従順さは、尊敬の念の表れであり、相手の優越性を認めたことで成立します。結局自由意志と従順さは、両立するものです。

「従順さ」という言葉は、一般に考えられている意味以上に高次元な意味があります。個人の自由意志を昇華したものという意味を持っています。従順さは、子どもの中で、他の性格と似通った発達をとげるように見えますが、遂には本人の意識に基いた自由意志の統制下におかれるようになります。

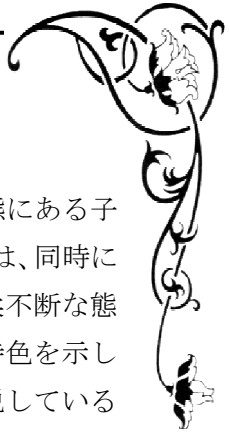
従順さの自然な発達とは三つの段階に分けられます。従順さの第一段階では、子どもは言うことをきくことが出来たり、出来なかったりします。3歳前では、命令される内容が、自分の生命衝動と一致していなければ、なかなか従えません。その後少しずつ様々な能力の発達と相まって、言うことをきけるようになっていきます。一度できる姿を見ると大人は「できるじゃないか。やらないのはおかしい」と思いがちですが、子どもの中ではまだ新しい形成は完成されていないのです。つまり、従順と不従順とが合わさったように見える時期なのです。その最中は子どもの意志をくじくのが一番有害です。

第二段階では、子どもは自分の意志だけではなく、他人の願望や状況を理解し、受入れ、合わせることができるようになります。これは従順さへの大きな前進です。今日の教育が絶えず目指している従順さの最高の形です。

しかし、子どもは、さらにその先に進みます。従順さの第3段階です。子どもは自らが「すばらしい」「優れている」と感ずる人に、積極的に辛抱強くその従順さを捧げるようになるのです。

従順でいられる能力は、意志の発達における最後の段階です。結局意志によって、より良い価値と思われるものに従うことが可能になるのです。従われる立場に立つものは、断定的な態度をとる必要はありませんが、強い責任感を持たなければなりません。

(要約文責: 園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第26章 モンテッソーリ教育法を 行う教員と子どもの規律(1)

モンテッソーリのお部屋は、静かで落ち着いていて、子ども達は一生懸命お仕事をしているというイメージがありますが、子どもたちが示している規律は、最初からあるものではありません。幼い生命は秩序に向う傾向性をもともと内在していますが、それは外に引き出される必要があるのです。規律への道を示してやるのが教師の仕事です。子どもは自分がやりたいものに会い、その対象に真剣に取り組むことによって、深い精神統合が生まれ、その結果として満足し、落ち着き、生き生きとしてきます。一人ひとりの子どもが、その領域に行けるように環境を整え、障害物をどけてあげるのが役目です。

初めのうち、3 歳になる子ども達は、大人からの不当な束縛に対しての反抗や逃避の防御行動を身につけ、それに終始する状態が多く見られます。しかし子ども達の精神の中には、英知と規律が目覚めさせられるのを待っているのです。子どもは自分自身を解放しなければならないということを、先生はよく頭に入れておく必要があります。ここが教育の「出発点」になります。

子どもをよく観察すると、単なる衝動と、建設に向おうとする自発的エネルギーとが見て取れます。先生には、まずこの二つを見極める力が必要であり、先生の子どもの対応の基礎となります。どちらも自発的様相を示し、自由意志による行動をおこさせますが、両者は正反対の結果をもたらします。子どもの精神が、発達に沿って、自由選択と精神集中作業と満足とを繰り返すことによって、秩序と自立と自己コントロール力と思いやりの力を獲得し、自己建設へと向う道筋を見ていきましょう。

混沌の状態にある子ども

初めに、簡単に混沌の状態にある子どもの三つのタイプを見てみましょう。

(1) 自由意志による行動は、無秩序な状態にある子ども：調和のとれない動きをする子どもは、同時に悪さをしたり、無鉄砲であったり、優柔不断な態度を取ったり、奇声をあげたりという特色を示します。しかし、通常の発達から見て逸脱している無数の目に付く点を矯正しようとするのではなく、先生は、調和の取れた動作がうまく発達できるようにと、その手段を子どもの興味を引くような形で提供してやりさえすればよいのです。

(2) 目の前にあるものに注意を集中することが困難または不可能という子ども：現実逃避の傾向があり、心は幻想の世界をさまよっている様子。精神を実在する物に向ける能力が付いてくれば、気持ちちはもとの健全な状態に戻り、正常にその機能を発達し始めます。目に付く軌道を外れた行為を、一々片っ端から直していく必要はありません。

(3) 何でも直ぐに人の真似をする傾向を持つ子ども：2 歳児以下の模倣とは全く別のもので、弱さが奥深くに根ざしています。この種の模倣傾向は、自分の意志の道具立てが出来ていない為におこります。無規律と情緒不安定に関係したもので、子どものレベルを低下させます。社会生活とは正反対の集団全体の無秩序を産みます。おおもとは一つです。前出と同様に、子どもを正しい位置においてあげるところからやり直しは始まります。

子どもに呼びかけることについて

こうした子どもの前に立つ先生は、目の前の逸脱した子どもの姿にとらわれてはいけません。子どもの生命に宿る、本来の神聖で純粹で高雅な精神の力を思いおこし、それが内在しているという強い信念を持たなければなりません。そして、自分の声と判断力で、子どもに対して声をかけ、目覚めさせてやるべきなのです。威勢よく、はっきりと呼びかけてやるのが子どもに対する親切というものです。さまよえる魂を呼び戻し、意識に乗せてあげるところから始まるのです。

(要約文責：園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第26章 モンテッソーリ教育法を 行う教員と子どもの規律(2)

見せかけだけの規律

自由に活動させる為に、先生は子ども達に心理的な準備をします。ふわふわとさ迷っている子どもの心も、実生活に結びついた本当にちょっとした単純な作業をさせるだけで、現実に戻ってきます。例えば、机と椅子を物音を立てずにきちんとしかるべき場所に並べさせるなどの事です。先生は、物静かで且つきっぱりとした忍耐強い声で、時には賞賛、時には戒めの響きをもって子どもの心に呼びかけます。

子ども達が落ち着いた様子を見せ始めたとしても、実際はまだ不安定です。これは見せかけだけの規律です。ちょっと手をつけては次々に新しいものに移っていったり、退屈したり、教具をおもちゃにしたり、別の子に悪さをしたり…こんな状態が見られるでしょう。そんな時、先生は困難を感じるものです。何とかおさえこもうとするあまり、先生の緊張感やあせりは、直ぐに子どもに伝播し、手が付けられない状態になったりもします。こんな時こそ、先生は子どもの理解をしなければなりません。子どもの精神は発達の上にあるのです。そして、ここが発達の重大な転機なのです。先生の忍耐と努力が最大限必要な時です。今こそ、先生は二つのことをしなければなりません。子どもを監督することと、一人ひとりに課題を与えるということです。規則正しく定期的に教材を提供し、正しい使用法を示し続けるのです。やがてその中のひとつが、子どもの心の奥深くに届くでしょう。そうすれば子どもの内なる「自我」が一つの対象物に向い始めます。反復練習に注意を集中し、その結果腕は上がり、その対象物を我が物とします。子どもは生き生きと輝き、満ち足りた態度を示し、魂が生まれ変わったことが傍目にも分かります。

規律

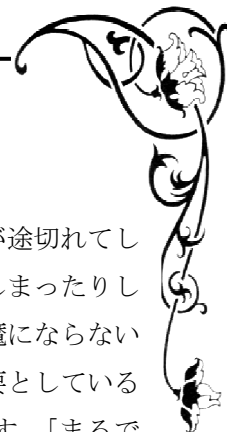
精神発達過程の中で、特別重要なのが自由選択です。外的刺激により、あれこれと手を出して次のものに移っていくのは、まだ本当の自由選択とはいえません。環境にもてあそばれている表面的な感覚の奴隷なのです。自分で自分の精神に気がつき、自分で意志をもって選択する時、初めて自分の中に人間性が生まれてきます。

自分の注意をある選ばれた対象に集中して、練習を繰り返すくせの付いた子どもは、もう心配がいりません。

精神集中の結果として社会感が目覚めます。ふっと我に返り、子どもは周囲を見渡し、「先生」を「発見」します。先生はいつでもそれに対応ができるようにしておきます。子どもは自分の作業を選ぶ事をますます自発的に行い、自己表現は一人でいよいよ豊富にするようになりますが、この時こそ、子どもは大人の権威を最も必要としているのです。つまり、先生の承認を求めたがっているのです。先生は、微笑みを持って、「それでよろしい」とうなづき応え、子どもを激励してやらなければなりません。表面的にほめたり、おだてたりするものではありません。「完成と自信」、それらが子どもの内部奥深くから発達してこなければならず、それを育ててあげるのです。

やがて子どもは大人の権威による承認を求めなくなります。その子の関心は、ただ自分の内面からの欲求に従って、自分の作業を成し遂げる事だけに向かうようになります。この子どもの純粋な前進を駆り立てる気高い本能は、単なる誇りや食欲とは無縁のものになっています。この期間に、本当の心の規律が確立されるのです。これが大事です。それは能動的平穩のあらわれ、従順と愛のあらわれであり、作業は完成へと向かい、さながら春の花が色鮮やかに咲き出し、はるか先の甘い滋養豊かな果実の収穫の準備をする姿といえましょう。

(要約文責： 園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より
**第27章 モンテッソーリ教員の
 為すべき準備**

モンテッソーリ教員の為すべき準備は、まず自分自身の準備をすることです。先生はこどもの前に立つ前に、「子どもは作業を通して本来の姿を現す」という信念を持たなければなりません。子どもは発達の途上にありますから、子どもの精神レベルが上がるにつれて、臨機応変の対応が必要です。通常三つの段階に分れます。

第1段階—先生は環境の管理者になります。教具は常に美しく完全で子どもの使用に耐えうるものであること。環境は、きちんと掃除がされ、清潔で秩序だっていることに本質的の魅力があります。先生は、いつも魅力的で明るく、きちんと清潔で物静かで、ある種の威厳あるものでなくてはなりません。そうした理想像を自分なりに実現していくのです。先生の外観は、子どもの信頼と尊敬を得る為の第一歩です。環境が子どもに与える影響は、身体的、知性的、精神的、その他のあらゆる面で効果的かつ永久的成果を残します。

第2段階—次に、先生は子どもに対しどう振る舞うかが問題となります。無秩序で混沌とした子どもの心を作業に惹き付けることが目標となります。まずは温かく子どもを受け入れ、勇気付けてあげましょう。子どもを魅了する素質を持つ先生は、子どもの気持ちを落ち着け、子どもに様々なことをさせてあげられる人です。この段階でしつこく友達の邪魔をする子にはストップをかけましょう。その方法は様々ですが、恐れる事はありません。一生懸命活動に向かっていく子どもは、絶対に守られなければなりません。

第3段階—子どもが何かに集中し始めたら、先生は絶対に邪魔をしてはいけません。先生は、つい妨げてしまうのです。子どもは試行錯誤しながら、「困難を克服する」ことに喜びを感じます。しかし心理的には、デリケート

で、先生のちょっとした介入で、集中が途切れてしまったり、独立心が依存心になってしまったりします。子どもへの本当の手助けは、邪魔にならないようにそっと離れ、子どもが本当に必要としている時に、さりげなく現れてあげることです。「まるで私が存在しないかのように子ども達は作業を続けている」と言えるなら成功です。

子どもは独立しなければなりません。自由に選択能力を駆使して、自立心を養うべきです。妨害されずに一人で作業しつつ、自分でものを考えられる人間にならなければなりません。独立独行を続けるうちに、初めて子どもは発達するのです。そういうものなのだと知って子どもに対するべきです。先生は、子どもが一人で行動し意図し思考することの手助けとなるのです。それが子どもの精神に仕える術なのです。

子どもの精神が立ち現れる時、先生は、今までとは違った愛に到達します。その愛とは、その子個人に対してではなく、もっと奥深いところに宿る何者かに対して感じられてくるものです。ここで今まで知らずにいた一段上のレベルに引き上げられたと思うのは、他ならぬ先生です。そして先生を導いたのは、子どもなのです。自然が子ども達に託した任務のうちには、私達大人を目覚めさせて、更に高いレベルへ引き上げることが含まれていることは明らかです。

先生は、「私は子どもの魂に仕えてきた。そして子どもは形成期に為すべきことを成し得た」と思い、そしてさらに深く「私は生命が、生来課せられている仕事を成就する手助けをした。人間形成の本質的部分において人類の手助けをしているのだ」と自覚し、自分のしている仕事の価値と成し遂げたことの意味を知るのです。これこそ純粋な喜びです。

子どもに仕えるとは、生命に仕えることです。人は生命、即ち自然。自然法は秩序そのものであり、やがて私達は大宇宙の秩序の中に再突入したのだと気付くでしょう。

(要約文責： 園長 正岡里鶴子)



マリア・モンテッソーリ著「創造する子ども」より

第28章 愛の源 — 子ども

モンテッソー教育の研修会では、世界各国から老若男女を問わず、言葉が違っていたり、政治的宗教的信条が異なっていようと、様々な人達が見事に一堂に会します。なぜなら、自分達を主張し合い争い合う大人達であっても、唯一子どもに関しては、万人が共通の感情を抱いているからです。即ち、子どもに話題を転ずる時、人の心は甘美なものとなり、内なる人間性が「子ども」への思いを介して、深い情感を分かち合うことができるのです。これは注目すべき重要なことです。この世に調和をもたらしたいと願うなら、この事についてよく考える必要があります。子どもは愛の源なのです。

戦争は比類ない破壊をもたらしました。今日、愛を云々するのは単なる皮肉や理想に過ぎないと言われそうな時代であるにもかかわらず、人々は依然として愛について論じ合っています。破壊や分裂の一方で、人間が互いに手を結ぼうとする力が働き続けています。何とも奇妙なことだとは思いませんか？ それはその力が、生命の働きそのものであるからだと言えましょう。その生命の働きが人間の意識にのぼった時に、それは「愛」という名前をもらったのです。愛は理想や幻想ではなく、現実存在するものです。人々が熱烈に愛を求めるとするならば、愛は存在するというばかりでなく、社会において強力な基礎をなしていくということを意味します。私達が愛と称するものは、宇宙最大のエネルギーを持っています。いや、エネルギー以上のものであり、創造そのものといっても良いでしょう。

愛について、聖書に次のようにあります。「愛は寛容にして慈悲あり、愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、非礼を行はず、己の利を求めず、憤ほらず、人の悪を念はず、不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、凡そ事忍び、おほよそ事信じ、

おほよそ事望み、おほよそ事耐ふるなり」(コリント前書、第13章4節～7節) この心像の記述は、子どもの資質を想起させます。子どもの「吸収する心」は、総てを受け入れ、総てを信じます。例え如何なる環境に生まれようと、貧困も裕福もあらゆる信仰も、既成概念や慣習もあるがままに受け入れ、総てを自分の血肉としていきます。そして、子どもの「総てを吸収する心」は人間社会の基礎を作っていきます。

人間の頭の中で、愛は非常に高いところにあるように考えられていますが、実は極めて複雑な宇宙の力の一側面なのです。あらゆる面で、この力が人間社会を安寧に導くものであるならば、それを無視すれば、間違いなく破滅に至ります。私達に与えられたこの力の値打ちは、人間がかじりついている文明の成し遂げた物質的征服を全部かき集めたところで、遠く及ばないほど大きいものです。私達が宇宙から跡形も無く消え失せても、この力自体は、創造、保護、救済という仕事を引き受け続けていくことでしょう。

愛はできる限り大切にし、拡大しなければなりません。私達人間は、この力を昇華し、次々に展開する能力を備えています。それが人間のなすべき仕事なのです。その力をもってすれば、人間が作りあげてきたものを統合へと導けるでしょう。反対にその力を借りなければ、作ったものはことごとく無秩序と破壊への道を繰り返すでしょう。ですから、何にも増して愛が大事なのです。

愛の力は、私達一人ひとりが自分の内に持つべく与えられています。人間の自由になる力のうちで最高のものです。その力は、子どもが生れるたびに新たなものとなり、私達はその力に対する絶ち難い願望を持ち続けるのです。私達は、愛の力をもっと研究し活用しなければなりません。愛を研究し活用しようとするれば、私達は結局、愛のあふれ出る源の子どもに行き着くこととなるでしょう。完。

(要約文責： 園長 正岡里鶴子)

*三年間ご愛読ありがとうございました